

清水山 I 遺跡ほか

平成16年3月

宮城県瀬峰町教育委員会

清水山 I 遺跡ほか

平成16年3月

宮城県瀬峰町教育委員会

発刊の辞

このたび、瀬峰町文化財調査報告書第22集を刊行することになりました。本書に収録しております報告は各種公共事業や個人による開発にかかわって調査したもので、調査面積は大きいものではありませんが、小規模な調査でも継続して行うこととで遺跡の内容を明らかにできるものと考えております。

また、遺跡の発掘調査成果は、調査後速やかに検討・整理を行い公表することで、研究者や町民をはじめとする一般の方々と共に情報をもつことができ、よりよい保存や活用ができるものと考えます。しかし、本報告書に収録いたしました調査成果の中には調査後相当の時間を経過しているものがあります。報告が遅れてしまつたことについてお詫び申し上げます。

今後調査成果を検討し、新たな知見を加えることで、それぞれの時代における地域の歴史が判明するものと期待しているところであります。

最後に、ご指導いただいた宮城県教育庁文化財保護課、ご協力いただいた地権者の皆様、調査に携わった作業員の皆様に感謝を申し上げ、発刊の挨拶と致します。

平成16年3月

瀬峰町教育委員会 教育長 濱田利昭

目 次

発刊の辞	
目 次	
例 言	
I. 遺跡の位置と歴史的・地理的環境	1
II. 清水山 I 遺跡第 1 次調査	5
III. 清水山 I 遺跡第 3 次調査	15
IV. 長者原 II 遺跡第 3 次調査	18
V. 民生病院裏遺跡第 3 次調査	23
VI. 民生病院裏遺跡第 4 次調査	39
VII. 岩石 I 遺跡第 4 次調査	41
VIII. 長者原 I 遺跡第 3 次調査	45
IX. 桃生田前遺跡第 3・4 次調査	48
X. 杉ノ壇遺跡	51
XI. 大境山遺跡隣接地の塚群	55
XII. 寺山遺跡採集の弥生土器について	61

図 目 次

第1図 清峰町の位置	1
第2図 清水山 I 遺跡ほかの位置と周辺の遺跡	4
II. 清水山 I 遺跡第 1 次調査	
第3図 調査区の位置	5
第4図 2号住居跡出土遺物	6
第5図 2号住居跡	7
第6図 清水山 I 遺跡第 2 次調査で 確認した遺構の位置	8
第7図 4号土坑	9
第8図 清水山 I 遺跡第 1 ~ 3 次調査で 検出した遺構の位置	11
III. 清水山 I 遺跡第 3 次調査	
第9図 調査区平面図	15
第10図 7号土坑	16
第11図 8号土坑	16
第12図 9号土坑	16
IV. 長者原 II 遺跡第 3 次調査	
第13図 調査区の位置	18
第14図 調査区平面図	19
第15図 1号竪穴遺構	21
V. 民生病院裏遺跡第 3 次調査	
第16図 調査区の位置	23
第17図 調査区平面図	25
第18図 古銭出土状況平面図	26
第19図 II層出土遺物 (1)	27
第20図 II層出土遺物 (2)	28
第21図 II層出土遺物 (3)	29
第22図 遺構外出土遺物	29
第23図 白鳥家墓地出土古銭 (1)	31
第24図 白鳥家墓地出土古銭 (2)	32
VI. 民生病院裏遺跡第 4 次調査	
第25図 白鳥家墓地出土古銭 (3)	33
第26図 白鳥家墓地出土古銭 (4)	34
第27図 白鳥家墓地出土古銭 (5)	35
VII. 岩石 I 遺跡第 4 次調査	
第28図 調査区の位置	39
第29図 1号土坑	40
VIII. 長者原 I 遺跡第 3 次調査	
第30図 調査区の位置	41
第31図 1号土坑	42
V. 長者原 I 遺跡第 3 次調査	
第32図 調査区の位置	45
第33図 調査区平面図	46
第34図 2号土坑	46
IX. 桃生田前遺跡第 3・4 次調査	
第35図 66号土坑	49
第36図 出土遺物	49
第37図 第 3・4 次調査で確認した遺構の位置	50
X. 杉の壇遺跡	
第38図 調査区の位置	51
第39図 調査区平面図	52
XI. 大境山遺跡隣接地の塚群	
第40図 遺跡の位置	55
第41図 調査区の位置	56
第42図 1~4号塚平面図	56
第43図 1~4号塚断面図	57
XII. 寺山遺跡採集の弥生土器	
第44図 寺山遺跡の位置と 弥生時代後期の遺跡	61
第45図 採集遺物	82
第46図 宮城県内と隣県の類似する弥生土器	84

表 目 次

II. 清水山 I 遺跡第1次調査	
第1表 貯藏穴状ビト	6
第2表 2号住居跡出土遺物集計表	6
第3表 清水山 I 遺跡第2次調査検出遺構	8
V. 民生病院裏遺跡第3次調査	
第4表 古銭のセット関係	30
第5表 出土遺物集計表	30
第6表 古銭観察表(1)	35
第7表 古銭観察表(2)	36
IX. 桃生田前遺跡第3・4次調査	
第8表 桃生田前遺跡第3・4次調査検出遺構	48
XI. 大境山遺跡隣接地の塚群	
第9表 1~4号塚属性表	57

図 版 目 次

II. 清水山 I 遺跡第1次調査	
図版1 2号住居跡(西より)	
2号住居跡カマド(西より)	
2号住居跡出土遺物	
図版2 3号土坑(西より)	
4号土坑検出状況(西より)	
4号土坑断面(西より)	
III. 清水山 I 遺跡第3次調査	
図版3 7号土坑(北より)	
8号土坑(西より)	
IV. 長者原 II 遺跡第3次調査	
図版4 1号豎穴遺構(北より)	
図版5 作業風景(西より)	
調査区中央付近(南より)	
調査区北側付近(南より)	
V. 民生病院裏遺跡第3次調査	
図版6 遠景(北より)	
3T調査風景(南より)	
5T基本層(東より)	
図版7 古銭・古鏡出土状況	
近世墓の断面(南より)	
近世墓出土遺物	
VI. 民生病院裏遺跡第4次調査	
図版8 立ち合い地点遠景(北より)	
1号土坑(西より)	
VII. 岩石 I 遺跡第4次調査	
図版9 1号土坑(北より)	
1号土坑壁の焼け面状況(南より)	
沢掘り下げ状況(西より)	
VIII. 長者原 I 遺跡第3次調査	
図版10 2号土坑検出状況(南より)	
2号土坑断面(北より)	
IX. 桃生田前遺跡第3・4次調査	
図版11 66号土坑(南より)	
出土遺物	
X. 杉の壇遺跡	
図版12 近景(北より)	
2T(北より)	
図版13 溝跡(東より)	
「大杉」「杉の壇」があったといわれる地点	
(東より)	
「大杉」「杉の壇」があったといわれる地点	
(東より)	
XI. 大境山遺跡隣接地の塚群	
図版14 遠景(西より)	
1号塚(南より)	
2~4号塚(北より)	
XII. 寺山遺跡採集の弥生土器について	
図版15 採集遺物	

例 言

1. 本書は、瀬峰町による町単独事業にかかる清水山 I 遺跡、民生病院裏遺跡、長者原 II 遺跡の事前調査と民生病院裏遺跡、桃生田前遺跡の工事立ち合い、各種開発にかかる清水山 I 遺跡、杉ノ壇遺跡、岩石 I 遺跡、大境山遺跡隣接地の塚群の確認調査、長者原 I 遺跡の工事立ち会いについての発掘調査報告書及び寺山遺跡採集遺物の資料報告である。
2. 調査要項は各報告に記した。
3. 土層の色調表現は『新編標準土色帳』に準拠し、土性区分については国際土壤学会に準拠している。
4. 国土座標は日本測地系を用いている。
5. 図中にある方位は、真北を表している。
6. 図面の縮尺は、遺構平面・断面図1/60、遺物1/3を基本としスケールを添えた。断面黒塗りは須恵器を示す。
7. 本書の内数遺跡で発掘調査後時間が経過して報告書作成を実施しているため、一部で資料の有無が不明なものがあり、報告書として不備なものとなつたことをお詫び申し上げる。
8. 本調査によって得られた資料は、すべて瀬峰町教育委員会で保管している。
9. 本書の整理はⅡ章とⅩ章を阿部正光、赤澤靖章、佐藤敏幸、Ⅺ章は阿部、佐藤信行、安達訓仁が行い、全体の執筆と編集は安達が行った。

I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県の北西部に位置する栗原郡は岩手、秋田両県と接している。瀬峰町はその中でも南東端に所在し、宮城県北部を南北に貫く奥羽山脈と、岩手県から宮城県北東部にかけて伸びる北上山地に挟まれた仙北平野低地帯のうち、北上川流域右岸の一角落に位置している。

ここは奥羽山脈から次第に標高を減じながら南東方向に連なる派生丘陵のほぼ末端部にあたり、周辺には県北湖沼地帯として知られる伊豆沼、内沼、長沼、燕栗沼が群在する。中でも、燕栗沼はかつて当湖沼地帯最大の水域を有していたが、江戸時代の新田開発、さらに近年の排水・開田事業によつて、現在ではその旧状をほとんど留めていないものの、瀬峰町を貫流する瀬峰川、小山田川、萱刈川の遊水池として、当町の東南部に隣接している。

町内の諸遺跡群は瀬峰町を東西に横切るなどからで低平な4つの丘陵上に位置している。近年、各地で小規模な開発が進んでいる。

各遺跡の基盤は疊層、砂岩、泥岩、凝灰岩からなる鮮新世：瀬峰層で、その上に疊層と凝灰岩から構成される更新世：高清水層、さらに最上層には第四系のローム層が堆積している。



第1図 瀬峰町の位置

2. 遺跡の歴史的環境

瀬峰町には丘陵上に多くの遺跡が所在している。ここではこれまでの調査、研究を踏まえ遺跡周辺の縄文時代から近世にかけての歴史的環境を記述する。

瀬峰町内では、縄文時代の遺物が出土する遺跡は19ヶ所を数えるが、その年代を特定できる遺跡は少ない。早期、前期では、条痕文土器の細片を出土する大鶴谷遺跡（縄文時代早期後葉）、織維土器を出土する大境山遺跡や下富前遺跡（早期後葉から前期前葉）がこの時代でも古い段階として確認している。これらに後続する遺跡に前期大木4式が出土する筒ヶ崎遺跡、大木4・5式と土偶が出土する下富前遺跡、大木6式が出土する大境山遺跡、空堤遺跡、岩石I遺跡がある。中期では大木8a式が岩石I遺跡、大木8b式が大境山遺跡、大木10式が岩石II遺跡、下富前遺跡から、後期では門前式が大境山遺跡から、南境式が大鶴谷北向遺跡から出土している。晚期の遺跡は今のところ知られていない。以上、時期のわかるものを列挙したが、これらはいずれも丘陵上に位置している。時期不明の遺跡についても同様である。また、ほとんどで土器の出土が極めて散発的で、しかも、破片が小量しか発見されないというのが現状である。今後、調査が進むと遺跡の数は増加すると考えているが、現時点では当町域における縄文時代のあり方は貧弱であるといわざるを得ない。その理由については現段

I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

階では、「縄文時代においては当町域は概ね、蕉栗沼沿岸諸遺跡の生活活動を補完する狩猟、採集の場として機能していた」(瀬峰町教育委員会1985)ためと考えている。

弥生時代の遺跡は大境山遺跡、岩石I遺跡、寺山遺跡の3ヶ所を確認している。いずれも瀬峰川と小山田川に挟まれた寺沢丘陵に立地しているが、他の丘陵では確認できていない。

古墳時代の前期の遺跡は大境山遺跡、泉谷遺跡、二ッ谷遺跡がある。寺沢丘陵に立地する大境山遺跡(瀬峰町教育委員会1983)では、標高約35m前後の丘陵頂部平坦面に11軒の住居跡が近接して発見されている。塩釜式期の土師器、紡錘車、砥石、黒耀石製ラウンド・スクレーバーなどが出土しており、住居跡数基を単位とする小集団の様子を具体的に知ることができるものである。泉谷遺跡でも、塩釜式期の土師器、黒耀石製スクレーバーを採集しているが、蕉栗沼に半島状に突出する標高約20m弱の丘陵上に位置することから、当時の生業や領域を考える上でも特筆できる遺跡である。中期の遺跡としては荒町遺跡、泉谷遺跡で土器が発見されている。後期の遺跡には泉谷館跡、民生病院裏遺跡、三代遺跡があり、いずれも標高約20~30m前後の丘陵上に位置する。泉谷館跡(阿部・赤澤・佐藤1987)では11棟の住居跡を検出し、栗園式期の土器とそれと併行する関東地方鬼高式期の土器が出土している。同様の関東系土器は出土状況は明確ではないものの民生病院裏遺跡(瀬峰町教育委員会1989)、大境山遺跡(瀬峰町教育委員会1983)、下富前遺跡(瀬峰町教育委員会2004)からも出土している。三代遺跡(阿部正光1983)では、栗園式期の中でも新しい段階に属する資料が得られている。以上、古墳時代の遺跡の概要を述べたが、いずれも蕉栗沼、もしくは、それに流入する小山田川を間に望める丘陵上に位置している。よって、当時既に小山田川の土砂運搬作業によって徐々に沖積化しつつあった旧蕉栗沼辺部において、遺跡ごとに水田經營が展開されていたと推定されるが、今後は各遺跡の編年とその関係をより詳細に究明することが必要である。なお、関東系土器に象徴される関東地方との交流経路については、当町が海岸部から離れた内陸部に位置するものの、舟を用いて北上川、追川を遡れば容易に宮城県北部湖沼地帯の一つ、旧蕉栗沼に到達しうるという地理的条件を備えているところから、陸路のほかに海路の存在も考えてゆく必要があろう。

瀬峰町で遺跡の数が最も多いのは奈良・平安時代で、49遺跡を数えることができる。桃生田前遺跡、下富前遺跡、桃生田遺跡は沖積地を望む微高地に立地している。現在までに寺沢丘陵に位置する岩石I遺跡、大境山遺跡、寺沢丘陵東端に位置する長者原II遺跡、民生病院裏遺跡、下藤沢II遺跡、下藤沢III遺跡、清水山I遺跡、下富前遺跡、桃生田前遺跡、荒町丘陵に位置する長根遺跡、四ッ壇原丘陵に位置する四ッ壇遺跡で発掘調査が実施されている。一連の調査によって、多数の住居跡と豊富な遺物を発見しており、宮城県北部における当時の集落構成を考える上で良好な資料を提供している。即ち、35,000m²を調査し、23軒の住居跡を検出した大境山遺跡(瀬峰町教育委員会1983)では、各住居跡が適度に散在する現象が顕著に認められるが、こうした傾向は前述の遺跡においても認めることができる。宮城県北部における集落の一タイプとして抽出されるものであろう。また、長根遺跡(瀬峰町教育委員会2003)では関東系土師器のみが出土した8世紀前葉の住居跡を調査している。一方、集落以外の遺跡はほとんど確認できておらず、藏骨器が出土した蒲盛遺跡(阿部・赤澤1984)が墓制に関する遺跡として知られている。

中世の城館跡は藤沢館跡などがあげられる。瀬峰川沿いの丘陵上に構築された単郭式で小規模のものである。下富前遺跡では14世紀初め頃の龍泉窯系青磁皿の破片が採集されており(佐々木・阿部1982)、発掘調査により小規模な建物や井戸跡で構成される屋敷跡を確認している(瀬峰町教育委員会2000, 2002, 2004)。この他、泉谷遺跡では13世紀前半頃の中世陶器壺口縁部破片、中三代遺跡や樹形館跡から中世陶器甕破片、荒町遺跡から14世紀初め頃の古瀬戸壺肩部破片、16世紀代の瀬戸あるいは美濃の大窯産と考えられる灰釉皿口縁部片や中世陶器を採集している。現在までのところ、中世の所産と考えられる塚には泉谷館跡方形溝状造構(阿部・赤澤・佐藤1987)がある。堆積土の状況からマウンドを持つ鎌倉時代中期から後期にかけての宗教的な塚であると考えている。その他に経塚と考えられる経壇遺跡、鎌倉時代の和鏡が出土した寺沢遺跡が知られている。なお、板碑については、大正年間に20数基あることが知られていた(鈴木玄雄1922)が、近年、破損したり、所在不明となっているものがあり、現在では18基確認されているに過ぎない(瀬峰町教育委員会1988)。

現在の瀬峰町は、近世においては奥州仙台領栗原郡の藤沢村、富村、中村に分かれていた。藤沢村には栗原郡と登米郡を結ぶ佐沼街道(高清水宿~佐沼宿~登米宿)の宿駅、瀬嶺宿が設置された。この瀬嶺宿の西方2.5km、藤沢村の寺沢地内と富村の北ノ沢地内を横切る佐沼街道には一里塚があり、交通史上貴重な造構である(宮城県教育委員会1994)。泉谷館跡は、仙台藩土橋本氏(知行高80貫380文)の在郷屋敷である。昭和61・62年度にかけて発掘調査が実施され、数棟の掘立柱建物跡や西門跡、塙跡などが検出された(阿部・赤澤・佐藤1987)。中村荒町地区の除と呼ばれる所は仙台藩土崎坂氏(儀板花子1979)の在郷屋敷で、寛永21年(1644)、所持となるまで居住したと伝えられる(鈴木玄雄1922)。町内には多数の塚が知られているが、確実に江戸時代とわかるものとしては、佐沼街道の一里塚、諏訪原経塚、清林塚、発掘調査によって盛土を伴う墓であることが判明した下藤沢Ⅱ遺跡(瀬峰町教育委員会1988)と下藤沢Ⅲ遺跡の塙群があるだけで、その大部分は所属年代は未だ明らかにされていない。

引用文献

- 阿部正光 1983 「瀬峰町三代遺跡出土の土器」『瀬峰町の文化財』第2集 集1~3頁 瀬峰町教育委員会
 阿部正光・赤澤靖章 1982 「瀬峰町大里字富盛出土の藏骨器、および骨片」『瀬峰町の文化財』第3集 6~9頁 瀬峰町教育委員会
 阿部正光・赤澤靖章・佐藤敏幸 1987 「瀬峰町泉谷館跡・清水山1遺跡発掘調査略報」『瀬峰町の文化財』第6集 12~23頁 瀬峰町教育委員会
 嶋坂花子 1979 『河北の臣―儀板文書とその背景―』篆刻印刷出版株式会社
 佐藤信行・阿部正光・赤澤靖章・佐藤敏幸 1987 「昭和61年度文化財バトロール事業報告」『瀬峰町の文化財』第6集 1~11頁 瀬峰町教育委員会
 佐々木尚見・阿部正光 1982 「瀬峰町の遺跡…桃生田前遺跡／下富前遺跡／中三代遺跡…」『瀬峰町の文化財』第1集 2~3頁 瀬峰町教育委員会
 鈴木玄雄 1922 「栗原郡藤里村誌」上巻栗原郡藤里村誌編纂委員会
 瀬峰町教育委員会 1977 「がんげつ遺跡—平安時代の竪穴造構の調査—」瀬峰町文化財調査報告書第1集
 瀬峰町教育委員会 1979 「長者原Ⅱ遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第2集
 瀬峰町教育委員会 1980 「がんげつ遺跡第2次調査報告書」瀬峰町文化財調査報告書第3集
 瀬峰町教育委員会 1983 「大境山遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第4集
 瀬峰町教育委員会 1985 「がんげつⅠ遺跡第3次調査」瀬峰町文化財調査報告書第5集
 瀬峰町教育委員会 1988a 「下藤沢Ⅱ遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第6集
 瀬峰町教育委員会 1988b 「長者原Ⅱ遺跡第2次調査」『昭和63年度宮城県遺跡調査成果発表会』発表要旨
 瀬峰町教育委員会 1989 「生病院裏遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第7集
 瀬峰町教育委員会 1996 「竪穴住居跡、畠などを検出 民生病院裏遺跡」『広報せみね』No. 338 瀬峰町

I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

瀬峰町教育委員会 2000『桃生田前遺跡 下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第19集

瀬峰町教育委員会 2002『下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第20集

瀬峰町教育委員会 2003『長根遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第21集

瀬峰町教育委員会 2004『下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第24集

宮城県教育委員会 1997『瀬峰一里塚』『宮城県の文化財』206頁

横要照 1966『宮城県瀬峰町の古代遺跡について』『瀬峰町史(全)』瀬峰町 551~559頁



%	遺跡名	種別	時代	%	遺跡名	種別	時代	%	遺跡名	種別	時代		
1	王道跡	塚	包含地	古代・中世(?)	21	保原道跡	包含地	塚	古代・中世・近世	47	清水山日遺跡	塚	中世・近世
2	四ノ塙遺跡	塚	包含地	古代・中世(?)	23	古塚道跡	塚	中世・近世	48	岩石王道跡	包含地	縄文(中)	
3	利形加納跡	塚	包含地	城館	24	清水山道跡	塚	古代	49	寺ノ沢道跡	集落跡・塚	古代・中世・近世	
4	殿上加納跡	城館	中世	25	下藤沢Ⅰ道跡	集落跡	古代	50	麻瀬道跡	火葬塚	古代		
5	藤沢加納跡	城館	中世	26	坂ノ下藤沢Ⅰ道跡	集落跡	縄文・古代	51	寺ノ浦道跡	包含地	縄文		
6	社塙道跡	經塚	中世	29	二ツ谷道跡	集落跡	古墳	52	清林塙道跡	塚	近世		
7	の福山道跡	包含地	縄文・古代	30	民生病院裏遺跡	集落跡	古墳・古墳	53	大鶴谷道跡	包含地	縄文・弥生		
8	古塚前道跡	城館	中世	31	八幡前道跡	塚	中世	54	桃生田遺跡	包含地	古代		
9	大畠谷北側道跡	包含地	縄文(後)	32	長者原Ⅱ道跡	集落跡	古代	55	瀬峰一里塚	塚	近世		
10	空堀道跡	包含地	縄文(前)	33	一本松道跡	包含地	古代	56	大寺道跡	包含地	縄文・弥生・古墳・古		
11	寺山道跡	寺觀跡(?)・古墳	佛生・平安(?)	34	大坂山道跡	集落跡	縄文・各先・古墳・古	57	新庄前道跡	城館跡	平安・中世		
12	妙田道跡	包含地	古代	35	坂ノ下藤沢Ⅱ道跡	包含地	古代	58	卯ノ尾山遺跡	集落跡	古代・中世		
13	若石Ⅰ遺跡	集落跡・塚	和歌・桃源記・時代	36	町田道跡	包含地	古代	59	折木山寺跡	寺院跡	中世		
14	下山道跡	包含地	古代	37	美沢東道跡	集落跡	縄文・古代	60	外沢田道跡	包含地	古代		
15	三代道跡	包含地	古墳・古代	38	桃生田前遺跡	集落跡	古代・中世・近世	61	下折木道跡	集落跡	平安		
16	荒町道跡	包含地	縄文・古墳・古代	39	下富前道跡	集落跡	縄文・古代・中世	62	下佐野道跡	包含地	古墳・古代		
17	筑ヶ崎道跡	包含地	縄文(前)・古代	40	柏青ヶ崎道跡	集落跡	縄文・古代	63	堂の池道跡	包含地	古代		
18	泉谷道跡	包含地	縄文・古墳・古代	41	中三代道跡	集落跡	古代	64	東ノ原道跡	包含地	歴・朝・隋・沈・明		
19	長者原Ⅰ道跡	包含地	古代	42	長根道跡	包含地	古代	65	中ノ塗道跡	包含地	中世		
20	下藤沢Ⅱ道跡	塚	古代・近世	43	五輪堂山道跡	集落跡	古代	66	觀音沢道跡	集落	縄文・古墳・古		
21	杉ノ塙道跡	塚・包含地	古代・中世・近世	44	桃森道跡	包含地	縄文・古代	67	興講寺道跡	寺院跡	古代・中世		
22	下藤沢Ⅲ道跡	包含地・塚	古代・中世・近世	45	ホイシ道跡	塚	中世・近世	68	外沢田Ⅱ道跡	集落跡	古代		
23	除崩跡	城館	近世	46	北ノ沢道跡	包含地	古代	69	高瀬城跡	城館跡	中世・近世		

第2図 清水山Ⅰ遺跡ほかの位置と周辺の遺跡

II. 清水山I遺跡第1次調査

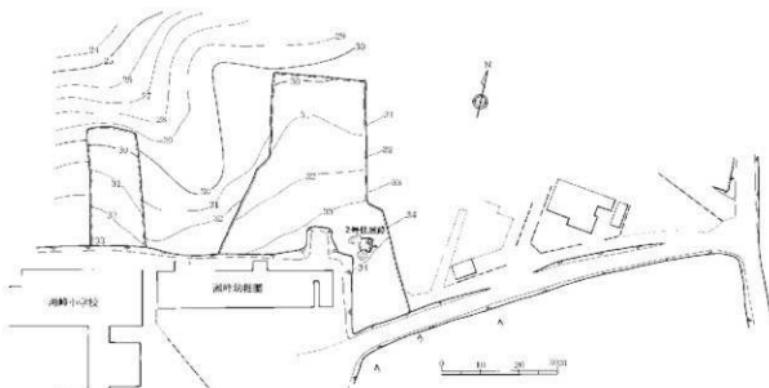
1. 要項

[遺跡名] 清水山I遺跡（遺跡登録番号：46032） [調査原因] 幼稚園建設に伴う事前調柶
 [所在地] 宮城県栗原郡瀬峰町大里字富清水山26-1 [調査面積] 1,750m²
 [調査期間] 昭和61年7月1日～3日
 [調査主体] 瀬峰町教育委員会教育長 葛城教信 [調査担当者] 瀬峰町教育委員会教育課社会教育主事 阿部正光
 [調査参加者] 佐々木尚見 飯塚義則 二上泰幸 笹川 広 高橋より子 松木きみよ 門脇浪次 佐藤信行
 笹川トミコ 今野高二 佐藤雅夫
 [調査協力] 宮城県教育庁文化財保護課

2. 調査に至る経緯

清水山I遺跡は、寺沢丘陵から派生する標高30mほどの丘陵頂上部から斜面に立地する。道路法面で住居跡（1号住居跡）、南側緩斜面では住居跡と考えている窪地を発見している。住居跡が窪地として残る遺跡は、県内では希であり貴重である。

昭和63年、それまで瀬峰町大里字富清水26-16にあった瀬峰町幼稚園が老朽化のため、同敷地内北側に移転する計画を策定した。対象地は清水山I遺跡の北西に隣接しており、杉と雜木で覆われた標高34m前後の丘陵頂部平坦面及び北側斜面であった。遺構の存在する可能性もあることから7月1日に重機を用いて表土除去を行ったところ、平坦面で竪穴住居跡1棟を検出したことから事前調柶に切りかえた。遺構の掘り下げ、精査、各種実測図（1/20）の作成、写真撮影（35mm、モノクロ）の作業を7月3日までに終了した。整理作業は昭和63年度中に遺構図面、遺構台帳の作成、遺物の整理はほぼ終了し、調柶の概要を報告した（阿部・赤沢・佐藤1987）。その後、平成11、15年度に断続的に作業を実施した。



第3図 調柶区の位置

3. 基本層序

基本層序についての詳細な記録がないため、I層を表土、II層を地山である黄褐色粘土とする。

4. 検出した遺構と遺物

(1) 住居跡と出土遺物

2号住居跡

- 〔確認面〕 II層。 [重複] なし。
- 〔規模〕 南北3.24m、東西3.00m。 [延床面積] 9.72m²。
- 〔平面形〕 並んだ方形。西隅と南東付近、北南西付近は風倒木痕により破壊される。
- 〔方向〕 N-7°-W(東辺)。
- 〔層位〕 大別2層、自然堆積。層No. 2には灰白色火山灰層が厚く堆積。
- 〔壁〕 II層。0.28m残存(南辺)。床面から垂直に立ち上がるが、南辺ではゆるやかである。
- 〔床面〕 II層。ほぼ平坦。
- 〔カマド〕 東辺中央。燃焼部と煙道部からなり、総長1.61m。燃焼部は奥行き0.56m、幅0.35m、燃焼部焚口付近で高さ0.12m。側壁は粘土を貼り付けて構築。燃焼部底面、奥壁、側壁内面は火熱によって赤変。底面から支脚として用いられた土師器甕が出土。煙道部は長さ1.05cm、幅0.16m、底面はほぼ水平であり、地山をトンネル状に繰り抜いている。先端に南北0.25cm、東西0.29m、深さ0.32cmの方形の煙出しピットがある。燃焼部と煙道部の境は約0.10cmの段差を持つ。
- 〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴状ピットは床面中央付近に位置する。東西1.00m、南北0.90mの円形で、深さは0.30m。断面は「U」。住居廃絶後の堆積土が入らないことから住居廃絶時には機能していない。
- 〔周溝〕 カマドを除き全周。幅0.06~0.14m、深さ0.03~0.08m。高低差はほと

番号	七色	土性	備考
上層	明黃褐色(0.017/0)	砂質粘土	粘性あり、かたい。中央にのみ分布。層厚5cm
中層	黒褐色(7.5W7/0)	砂質粘土	粘性あり、かたい。層厚2cm
下層	灰・黄褐色	砂	粘性なく、かたい。層厚1cm

第1表 貯蔵穴状ピット

種類	土層面
層位	上層
層No. 4	5
層No. 7	2
計ピット数	1
カマド底面	1
床面	1

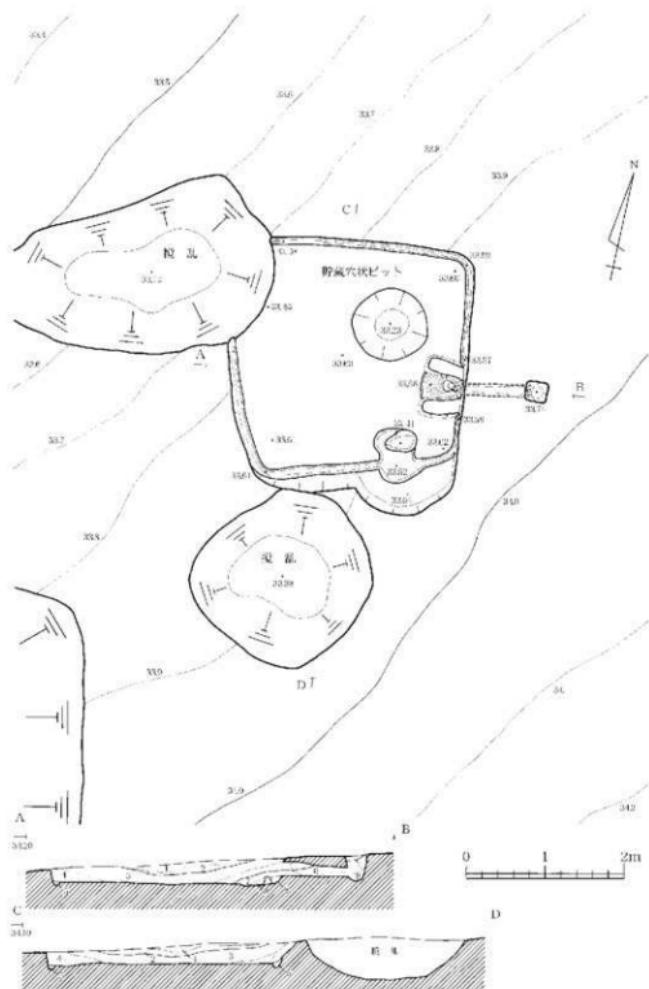
実測資料は缺く

第2表 2号住居跡出土遺物集計表



No.	層別	層位	特徴	層厚	範囲
1	上層	外: 灰褐色・ダモ、内: 磁子テラ・ミガキ・黑色斑塊、高(7.5W8/0)7/1		1-1	
2	中層	外: ブラウン、内: ブラウン		1-2	
3	下層	カマド底面: 外: ブラウン・ダモ、内: ブラウン		1-2	
4	下層	カマド底面: 外: ブラウン・ダモ、内: ブラウン		1-1	

第4図 2号住居跡出土遺物



No.	土色	土性	備考	堆積層
1	黒色 (1.5)E2/1	シルト		
2	浅褐色 (2.5)7/3	シルト	灰白色火山灰	大崩日層
3	褐色 (10)4/14	砂質シルト	黄褐色 (10)5/5 砂質シルト多層状に含む	
4	褐色 (10)3/9	リメシルト	リメシルト	大型立柱
5	灰褐色 (10)3/4	砂質シルト	黄褐色 (10)5/6 砂質シルト多層状に含む	同層
6	褐色 (10)4/9	砂質シルト	砂土多層状に含む。黄褐色砂質粘土を複数に含む。	
7	褐色 (10)4/6	砂質シルト	カマド崩落土をブロック状に含む。黄褐色 (10)5/6 砂質粘土を複数に含む	カマド
8	暗褐色 (5)8/2/3	シルト	カマド崩落土。碳化物を供給する	

第5図 2号住居跡

II. 清水山Ⅰ遺跡第1次調査

んどない。

〔出土遺物〕床面、堆積土、カマド堆積土から土師器壺、甕、須恵器壺が出土。

(2) 遺構外から出土した遺物

遺構外及びⅠ層から遺物は出土しなかった。

5. 下水管付設に伴う工事立ち会いの概略（第2次調査）

平成14年10月30日から平成15年2月8日まで下水管付設に伴う工事立ち会いを実施した。対象面積は385m²である。概要について報告する。

対象地は既に宅地化されているが、遺構や旧地形の残存状況を確認するために工事立ち会いを実施した。当初は断面で確認作業を行い、遺構を確認してからは平面的に確認作業を行った。その結果、大部分では既に削平を受け舗装盤直下で地山である黄褐色粘土や白色粘土を確認したが、西側では旧表土と考えられる黒色土が残存すること、また、既削平地点であっても遺構や沢状の落ち込みが残存することを確認した。検出した遺構の概要は第3表、位置は第6図に示した。ここでは主要な遺構について報告する。なお、遺物は出土していない。

遺構名	検出面	確認面	平面形	基 標(幅、深さ)	地 積	備 考
3号土坑	地山面	地山面	—	上幅1.1m、深さ0.92m	にがい黄褐色砂質シルト～黒灰色シルト質粘土	断面で確認、遺物は確認できない。
4号土坑	地山面	地山面	調丸方形	南北0.78m、東西0.75m以上、深さ0.10m	灰青褐色シルト質粘土	柱痕跡…径0.16m、深さ0.18m
5号土坑	地山面	地山面	—	上幅0.65m、深さ0.16m	黒褐色粘土質シルト	断面で確認、遺物は確認できない。
6号土坑	地山面	地山面	調丸方形	南北0.60m以上、東西0.88m、深さ0.13m	黒褐色粘土質シルト	底面は凹凸がある。木の根のかく乱か

第3表 清水山Ⅰ遺跡第2次調査検出遺構



第6図 清水山Ⅰ遺跡第2次調査で確認した遺構の位置

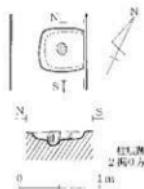
4号土坑

- 【位置】町道地点。 【検出面】II層。
- 【平面形】隅丸方形。 【規模】南北0.75m、東西0.76m以上、深さ0.16m
- 【堆積層】大別1層。人為堆積。
- 【その他】径0.13~0.15mの円形の柱痕跡を確認。深さ0.18m。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【所見】検出した遺構は掘立柱建物跡を構成する柱穴の1つと考えられる。また、規模や形態などから町内での類例をさがすと大境山遺跡1、2号建物跡（瀬峰町教育委員会1983）、桃生田前遺跡25号建物跡（瀬峰町教育委員会2000）の柱穴と類似することから古代のものと考えることができる。しかし、調査区の関係から建物跡の規模や方向など不明な点が多い。

【備考】南側では断面で遺構確認作業を行っていたことから、南側に延びるかは不明である。北側では平面的に確認作業を行ったが、遺構を確認することはできなかった。



第7図 4号土坑

6. 検討

2号住居跡とこれまで確認した遺構について、検討を行う。

(1) 2号住居跡出土遺物の位置づけ

ここでは、特徴が把握しやすい実測資料を分類し、年代について検討を加える。

【土器類】

いずれもロクロを用いないで製作されたものである。図化した遺物は壺2点、甕1点である。

壺I類 体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。外面は口縁部ヨコナデ、体部はヘラミガキが施される。内面はヘラミガキ、黒色処理される。

壺II類 体部から内湾しながら立ち上がり口縁部で直立し、平底である。外面は口縁部はヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリが施される。内面はヘラミガキ、黒色処理される。

甕I類 小型のものである。頸部に段をもち、口縁部はわずかに外傾し口縁部は直立する。外面は体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデである。底部は摩滅のため不明である。内面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデである。

【須恵器】

図下した遺物は壺1点である。破片資料にも含まない。

壺I類 底部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する。底部切離しはヘラケズリによる再調整で不明である。

II. 清水山I遺跡第1次調査

以上の分類から、清水山I遺跡2号住居跡出土遺物は土師器壺では内面黒色処理、甕では頸部に段を持ちケズリ調整されることから東北地方南部の土器様式に含まれるものである。遺物は住居廃絶前後の遺物と考えられる床面から出土した土師器壺II類、須恵器壺I類、住居機能時の遺物であるカマド底面から出土した土師器壺I類、甕I類がある。住居廃絶前後の床面出土遺物（堆積層出土遺物も含む）と機能時のカマド内出土遺物は若干の時間幅を持つと考えられるが、器形や調整の特徴に大きな変化はない。このことから図示した出土遺物は住居機能時から廃絶前後までの若干の時間幅を持つ遺物と考えることができる。

清水山I遺跡2号住居跡出土遺物と類似するものに追町対馬遺跡4号住居跡（加藤・伊藤1955、小井川・高橋1979）、名取市清水遺跡58号住居跡（宮城県教育委員会1980）などがある。

対馬遺跡4号住居跡では非ロクロ調整の土師器壺、甕、瓶、須恵器甕が出土しており、壺が多数を占める。これらはカマド周辺から出土したとされている。壺はいずれも平底で体部は外傾しながら立ち上がる。調整は摩滅が著しいがケズリのほかヘラミガキも行われており、壺II類と類似する。また、器高が高く深い壺II類に類似するものもある。甕では大型のものが多い。小型のものでは調整は類似するが頸部に段をもたず、口縁部の形態は異なっている。土師器瓶、須恵器壺、甕は2号住居跡では出土していないため検討はできない。対馬遺跡4号住居跡出土遺物のうち土師器壺には多くの類似点がある。

名取市清水遺跡58号住居跡からは土師器壺、鉢、甕、須恵器壺が出土している。壺は平底か丸底に近い平底であり、外面はケズリやミガキ調整、口縁部付近は横ナデされる。甕は胴部に張りを持つもので頸部に段があり、甕I類とは形態が異なる。須恵器壺は器高が高く深いものである。底部切り離しは回転ヘラ切りの後手持ちヘラケズリ再調整が施されている。土師器鉢は出土しないことから検討できない。名取市清水遺跡58号住居跡のうち土師器壺の形態は類似するが細部の調整は異なる。この相違が地域性を示すかはさらに検討が必要である。

これらの類例は国分寺下層式（氏家和典1967）のもので、新段階（仲田茂司1989）に位置づけられている。清水山I遺跡2号住居跡出土遺物は出土遺物の数量が少なく器種の欠落がみられるが上記の類例と同時期のもので、年代は8世紀末頃と考えている。

（2）遺構の検討

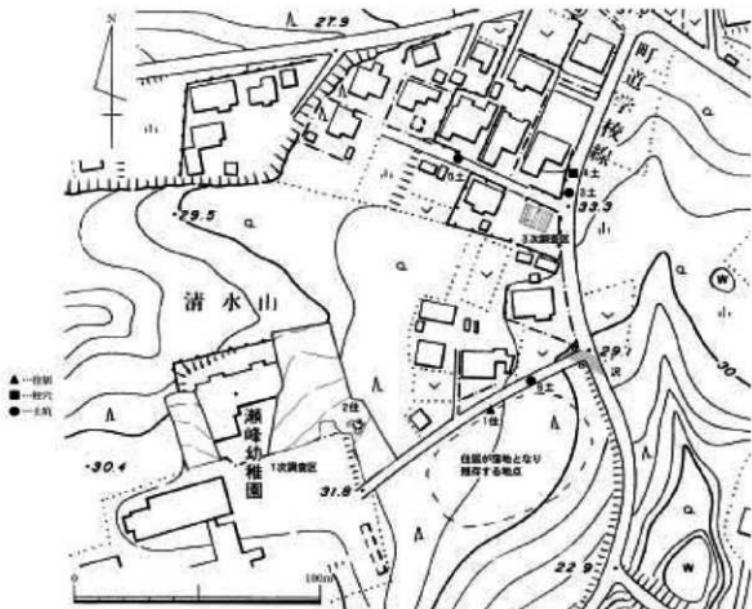
①住居跡の構造

住居跡は1辺約3m程の歪んだ方形である。カマド、貯蔵穴状ピット、周溝などの施設を確認したが、主柱穴は確認できなかった。住居周辺でも柱穴など確認できておらず、この場合どのように上屋構造を支えたのかは考古学的に解明することはできない。ところで瀬峰町内や小山田川沿岸の諸遺跡でも主柱穴がない竪穴住居跡は多数確認されている。類例として下富前遺跡1号住居跡（瀬峰町教育委員会2000）、大境山遺跡3、4、6、12、13、16、18、25、26、28、32、33号住居跡（瀬峰町教育委員会1983）、高清水町五輪C遺跡1、4、6、8号住居跡（宮城県教育委員会1980）、松ノ木沢田遺跡竪穴住居跡（宮城県教育委員会198）、田尻町新田柵跡推定地SI04号住居跡（田尻町教育委員会1997）、129号住居跡、SI145工房跡？（田尻町教育委員会2001）などがあり、さらに宮城県内でも多数検出されていることから、主柱穴をも

たない住居は一般的なものであると考えている。さらに、東国では奈良・平安時代になると主柱穴が確認できない例が増えるという指摘もある(宮本長二郎1990)。今後主柱穴が確認できない例での上屋構造を考える際、建築材の残存状況が良好な焼失住居跡で検討を加える必要があると考えている。

②集落構造

検出した住居跡は1棟である。また、これまでの踏査等により第8図のような遺構を確認している。小学校裏門より約43m付近の道路法面には同時期の住居跡(1号住居跡)、さらに道路南側の平坦面には窪みが認められる。窪みはボーリング調査により焼土を確認しているため、住居跡と考えることができる。窪みとなっている住居跡が最低3棟、不明瞭なもの2棟があるが、発掘調査を実施していないため詳細な時期は不明である。ところで、周辺では工事立ち会いを実施している(第2次調査)。時期は不明であるが沢状の落ち込みを確認し、これらの住居跡が沢頭付近の丘陵頂上部及び緩斜面に位置する。沢の北側で時期不明の土坑2基、規模から古代の柱穴と考えている土坑1基を確認した。清水山I遺跡の集落は丘陵頂上部及び緩斜面付近に位置し、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などで構成される可能性が高い。しかし、遺跡範囲の北側は完全に宅地化され、削平を受けていることから、



第8図 清水山I遺跡第1～3次調査で検出した遺構の位置

II. 清水山I遺跡第1次調査

集落構造を把握することは困難である。現在林地となって残存する地点の様相を解明することと個人住宅建て替えなどでの確認調査により、集落の様相を解明することが重要である。

7. まとめ

- (1) 清水山I遺跡は標高約30mの丘陵頂上部及び緩斜面に位置する。小学校裏門付近の山林には未埋没の竪穴住居跡を確認している。
- (2) 竪穴住居跡1棟を確認した。出土遺物の検討から8世紀末の年代が考えられた。
- (3) 下水管付設に伴う工事立ち会いでは、古代と考えられる建物跡を構成する柱穴を1基確認していることから、清水山I遺跡の集落は竪穴住居跡と掘立柱建物跡で構成される可能性が高い。しかし、調査が進んでいないことから集落構造や存続時期などは今後の課題である。

引用文献

- 加藤 孝・伊藤玄三 1950 「宮城県登米郡新田村字對馬竪穴住居址群」『登米郡新田村史』13~25頁 宮城県登米郡新田村
小井川和夫・高橋守克 1977 「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学』第5号 22~34頁 宮城教育大学歴史研究会
瀬峰町教育委員会 1983 「大境山遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第4集
瀬峰町教育委員会 2000 「桃生田前遺跡・下富前遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第19集
田尻町教育委員会 2001 「新田柵推定地3」「新田柵推定地3ほか」田尻町文化財調査報告書第5集
宮城県教育委員会 1979 「五輪C遺跡」宮城県文化財調査報告書第61集
宮城県教育委員会 1981 「松ノ木沢田遺跡」『東北地盤バイパス関係遺跡調査報告書』宮城県文化財調査報告書第76集



2号住居跡（西より）



2号住居跡カマド（西より）



1. 土師器壺



2. 土師器杯



3. 土師器杯



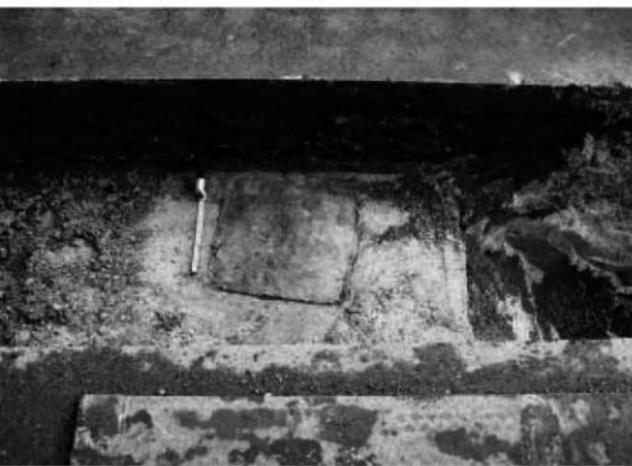
4. 須恵器杯

2号住居跡出土遺物

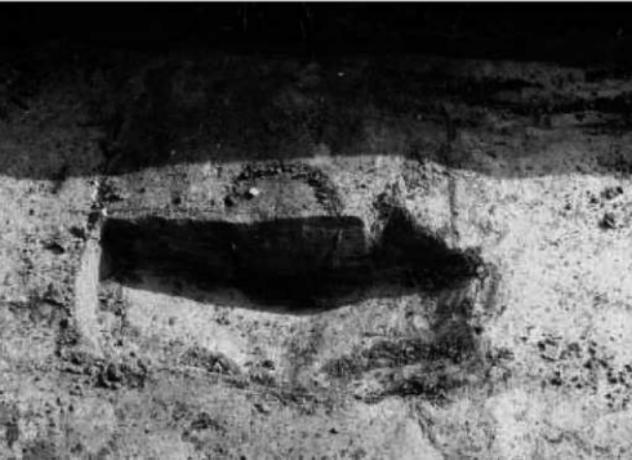
図版1（1次調査）



3号土坑（西より）



4号土坑検出状況（西より）



4号土坑断面（西より）

図版2（2次調査）

III. 清水山I遺跡第3次調査

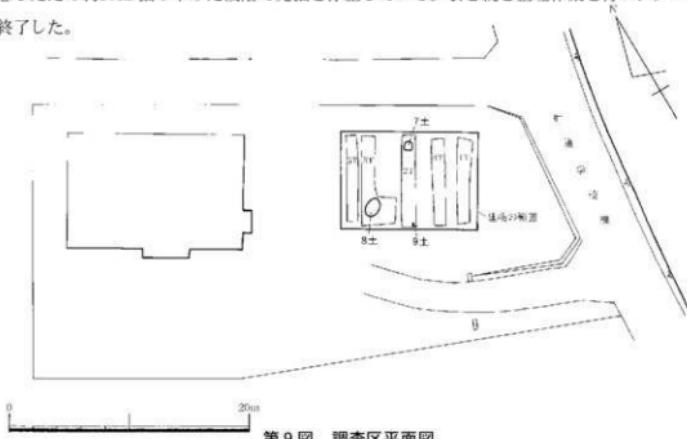
1. 要項

- [遺跡名] 清水山I遺跡（遺跡番号：46032）
 [所在地] 宮城県栗原郡瀬峰町大里字富清水山33-1
 [調査期間] 平成16年1月26日
 [調査主体] 瀬峰町教育委員会教育長・濱田利昭
 [調査参加者] 鈴木茂、高橋崇行、亀井重行（株佐々真土建）
 [調査協力] 宮城県教育庁文化財保護課、一条工務店宮城
- [調査原因] 個人住宅建て替えに伴う確認調柶
 [調査面積] 50m²（対象面積92m²）
 [地権者] 菅原英夫、菅原幹男
 [調査担当者] 瀬峰町教育委員会社会教育課主事・安達訓仁

2. 調査に至る経緯

平成15年10月1日付けで菅原幹男氏より個人住宅建て替えに伴う協議書の提出を受けた。対象地は清水山I遺跡の範囲内に含まれるが、昭和30年代に既に宅地化された地点である。下水管付設に伴う工事立ち会い（第2次調柶）の成果などから遺構が残存したとしても非常に悪いと考えた地点である。計画の内容を確認したところ、既存の建物を撤去後新築するもので、パイル工法であることが判明した。このことから遺構の有無を確認する必要があると判断し、協議を行い確認調柶を実施することとした。その後、平成15年11月14日付けで理蔵文化財発掘の届け出の提出を受けた。

確認調柶は既存建物解体終了後の平成16年1月26日に実施した。廃土置き場が取れないことから、調柶はトレンチ掘りにより行うこととし、幅1.2m、長さ7mの調柶区を東側、中央、西側の3ヶ所設けた。2Tでビット、土坑、3Tで土坑を確認したことからさらに2つ調柶区を設けた。しかし、上記のトレンチ以外では遺構を確認することはできず、また、遺物も出土しないことから、1/50で平板測量による平面図、遺構は1/20で平面図、断面図を作製、写真撮影（35mmカメラ、カラー）を行い調柶を終了した。なお、8号土坑はパイルの影響を受けないことが判明したことと底面まで深さがあると予想したため約25cm掘り下げた段階で発掘を停止している。引き続き整理作業を行い、すべての作業を終了した。



第9図 調柶区平面図

3. 基本層序

対象地は2度建て替えが行われている。約30cmほどの山砂や碎石（I層）を撤去すると地山であるグライ化した灰白色（10YR8/2）粘土（II層）となる。遺構はすべてこの面で確認した。

4. 検出した遺構と遺物

土坑2基、ピット1基を確認した。これらの遺構や

基本層から遺物は出土しなかった。

7号土坑

[確認面] II層。

[位置] 2T北側。

[平面形] 隅丸方形。長軸0.7m以上、短軸0.7m。

[壁] II層。高さ0.08m。やや急に立ち上がる

が、東側ではゆるやかに立ち上がる。

[底面] II層。ほぼ平坦。

[堆積層] 1層。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

8号土坑

[確認面] II層。

[位置] 3T南側。

[平面形] 楕円形。長軸1.51m、短軸1.2m。

[壁] II層。高さ0.25m以上。ほぼ垂直に

立ち上がる。

[底面] 完掘を行っていないため不明。

[堆積層] 大別4層。2層（層No.3）は人為堆積と考え

られ、その他は自然堆積である。非常にかたく締まっている。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

9号土坑

[確認面] II層。

[位置] 2T南側。

[平面形] 方形。長軸0.2m、短軸0.19m。

[壁] II層。高さ0.11m。ほぼ垂直に立ち上がる。

[底面] II層。ほぼ平坦。

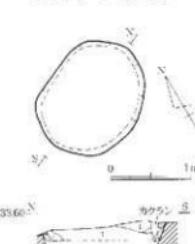
[堆積層] 大別2層。1層は炭化物、焼土を多く含む。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。



第10図 7号土坑

No.	土色	土性	含有物	堆積範囲
1	灰褐色 (10YR5/2)	シルト	黄褐色粘土粒を細かく含む。かたい。	大別1層



第11図 8号土坑

No.	土色	土性	含有物	堆積範囲
1	灰褐色 (10YR5/4)	シルト	黄褐色粘土粒を細かく含む。かたい。	大別1層
2	灰褐色 (10YR5/2)	粘土	地山粒やや多く含む。かたい。	大別2層
3	灰褐色 (10YR5/2)	粘土	地山粒を多く含む。かたい。人為堆積。	大別3層
4	灰褐色 (10YR5/2)	シルト	黄褐色粘土粒を若干含む。かたい。	大別4層
5	灰褐色 (10YR5/2)	粘土	細かい地山粒を多く含む。	大別4層
6	以下	未標	未標	未標

第12図 9号土坑



No.	土色	土性	含有物	堆積範囲
1	灰褐色 (10YR5/2)	粘土	炭化物、燒土、礫を多く含む。	
2	灰褐色 (10YR5/2)	粘土	黄褐色粘土粒、炭化物を若干含む。	

第12図 9号土坑

5. まとめ

確認調査の結果、遺構が残存していることを確認できた。しかし、遺構や周辺から遺物が出土しないことと建物基礎及びパイルの影響を受けないので完掘を行わなかったものがあることから、遺構や調査区の性格を検討することができない。ここでは気づいた点について若干触れまとめとしたい。

7号土坑は方形を基調とするものである。下水管付設に伴う工事立ち会いで柱穴と考えられる4号土坑があることから、柱痕跡が確認できるか確認作業を行ったが、確認することができなかった。また、周辺の調査区でも関連する遺構を確認できていない。4号土坑とは約22m離れていることから建物を構成する柱穴の可能性は低いと考えている。9号土坑では上層に焼土、炭化物が確認できたことから、周辺で何らかの火を用いた作業が行われていたことが推定できる。形態からは住居の煙出しピットである可能性も残るが、性格は不明である。今後さらに周辺の調査を待って検討する必要がある。

7号土坑（北より）



8号土坑（西より）



IV. 長者原II遺跡第3次調査

1. 要項

- 【遺跡名】長者原II遺跡（遺跡番号：46038） [調査原因] 農道長者原線改良舗装事業に伴う確認調査
 【所在地】宮城県栗原郡瀬峰町寺沢字長者原32-5、35-4 [調査面積] 約1,470m²
 【調査期間】平成6年11月15日～12月2日
 【調査主体】瀬峰町教育委員会教育長・及川秀美
 【調査担当者】瀬峰町教育委員会課長補佐兼社会教育主事 阿部正光
 【調査参加者】飯塚義則、高橋正昭、鎌田弘司、高橋甲吾、幸田岱生
 【調査協力】宮城県教育庁文化財保護課、瀬峰町建設課、倅佐々木工務所

2. 調査に至る経緯

長者原II遺跡は寺沢丘陵から派生する標高約25～30mの丘陵の北東に傾斜する緩斜面に位置する。水田、畑として利用されているが、近年宅地化が進んでいる。宅地造成に伴う第1次調査では竪穴住居跡4棟（瀬峰町教育委員会1978）、第2次調査では竪穴住居跡8棟、掘立柱建物跡1棟、小竪穴造構2基（未報告、瀬峰町教育委員会1988）を確認しており、奈良時代から平安時代の集落跡である。

平成6年11月、瀬峰町建設課より長者原II遺跡に隣接する農道の改良計画と同年中に工事着手するという連絡をうけた。教育委員会では宮城県教育庁文化財保護課と連絡を取り、協議の結果、確認調査を実施することとした。

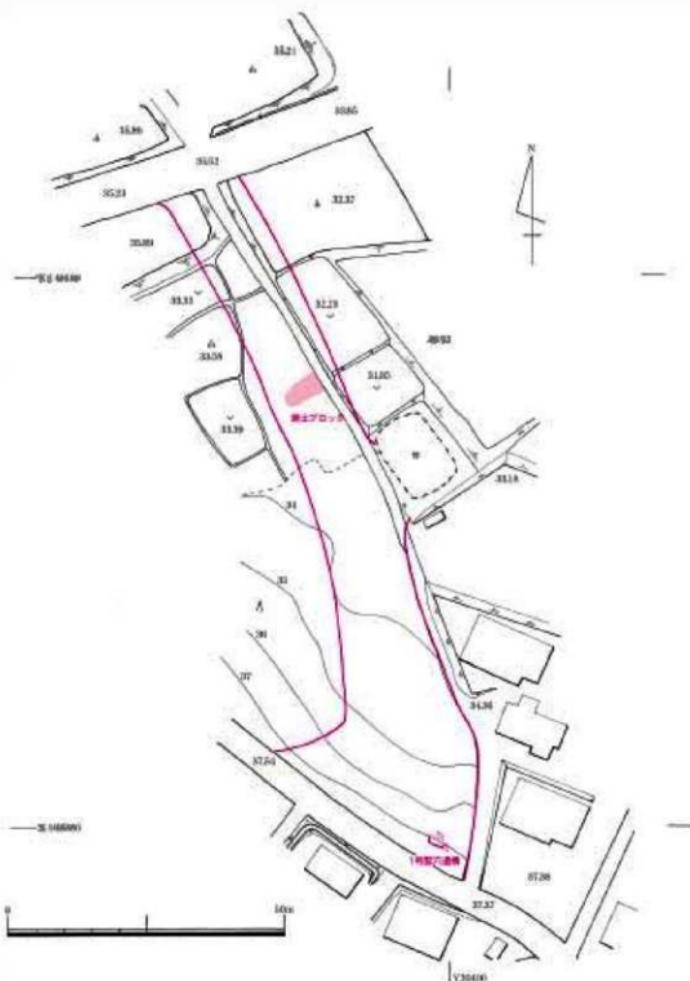
確認調査は11月15日より開始した。重機により表土除去を行い、調査区南側で竪穴造構1基、北側で焼土造構とみられる造構を検出した。造構数が少なかったため、事前調査に切り替え、12月2日までに造構の精査、並びに実測、写真撮影等を行い、調査を終了した。最終的な造構の数は竪穴造構1基である。検出した造構は真北方向の遣り方を設定して、各種記録（1/20の平面図及び断面図）の作成や写真記録（35mmカラー）を行った。整理作業は平成10年度、15年度に実施した。

3. 基本層序

基本層序は田地、畠地、荒れ地で異なると考えられるが、詳細な記録がないことから便宜的に耕作土等（層厚約40cm）をI層とし、地山である明黄褐色（10YR6/8）砂質粘土をII層とする。なお、造構確認面はすべてII層で行っている。



第13図 調査区の位置



第14図 調査区平面図

4. 検出した遺構と遺物

検出した遺構は竪穴遺構1基である。調査時の平面略図には焼土遺構の記録があるが、詳細な記録や写真を発見できることから、第14図に位置のみを記載する（註1）。

(1) 穫穴遺構と出土遺物

1号竪穴遺構

[確認面] II層。 [重複] なし。

[規模] 南北1.44m以上、東西2.90m。

[平面形] 削平により残存状況は不良。南辺から西辺にかけて検出。方形を基調とすると考えられる。

[堆積土] 大別2層。いずれも自然堆積。層No.2には灰白色火山灰が2次堆積する。

[壁] II層。約0.11m(南辺)残存し、底面よりゆるやかに立ち上がる。

[底面] II層を底とし、凹凸はない。北側にゆるやかに傾斜する。底面は全体的にかたい。

[出土遺物] 出土しなかった。

5. まとめ

調査地点は長者原II遺跡に近接し、調査の結果、遺跡の範囲はさらに北に広がることが判明した(註2)。周辺には民生病院裏遺跡や清水山I遺跡などが分布しており、一連の集落であった可能性が高い。今後周辺での調査、研究が注目される。

次に遺構について検討を行う。1号竪穴遺構からはカマドや主柱穴などの施設は確認できなかつた。カマドを持ち主柱穴がない住居跡として下富前遺跡1号住居跡(瀬峰町教育委員会2000)、大境山遺跡3、4、6、12、13、16、18、25、26、28、32、33号住居跡(瀬峰町教育委員会1983)、清水山I遺跡2号住居跡(本書参照)をあげることができる。これらの類例のほとんどが3~4m前後の規模であり、1号竪穴遺構とほぼ同規模である。このことからカマド部分が削平された竪穴住居跡の可能性を考えている。遺物は出土していないが、層No.2には10世紀前葉頃に降下したと考えられる灰白色火山灰(註3)が堆積しており、初期堆積土を覆うことから灰白色火山灰層降下以前の10世紀前葉頃には廃絶していたとすることができる。

註

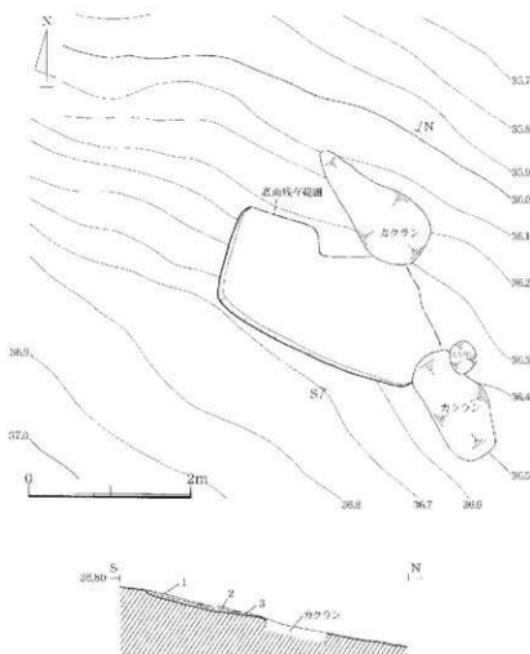
註1 調査区の範囲が不明なため、第14図では工区を赤で示した。

註2 長者原II遺跡は平成14年度に下水道管付設に伴う工事立ち会いを実施し、平成15年6月に範囲を拡大した。

註3 灰白色火山灰の降下年代は考古学的には西暦907~934年の間と考えられている(宮城県多賀城跡調査研究所1998、76頁)。また、「扶桑略記」などの記述から西暦915年をあてる見解もあるが、ここでは考古学的な事実関係から西暦907~934年と考える。

引用文献

- 瀬峰町教育委員会 1977『がんげつ遺跡—平安時代の竪穴遺構の調査—』瀬峰町文化財調査報告書第1集
瀬峰町教育委員会 1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集
瀬峰町教育委員会 1988『長者原II遺跡第2次調査』『昭和63年度宮城県遺跡調査成果発表会』発表要旨
瀬峰町教育委員会 2000『桃生田前遺跡 下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第19集
宮城県多賀城跡調査研究所 1998『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1997



第15図 1号竪穴遺構



1号竪穴遺構（北より）



作業風景（西より）



調査区中央付近（南より）



調査区北側付近（南より）

V. 民生病院裏遺跡第3次調査

1. 要 項

- [遺跡名] 民生病院裏遺跡（遺跡登載番号：46036）[調査原因] 潟峰中学校体育館造成に伴う確認調査
 [遺跡所在地] 栗原郡瀧峰町大里字富桙生田地内 [調査面積] 約1,500m²
 [調査期間] 平成11年1月12日～1月21日
 [調査主体者] 瀧峰町教育委員会教育長 及川秀美 [調査担当者] 瀧峰町教育委員会社会教育課主事 安達訓仁
 [調査参加者] 佐々木尚見、菅原正剛
 [調査協力] 真山悟、村田晃一、山田晃弘（宮城県教育庁文化財保護課）、瀧峰町建設課、㈱佐々賀土建

2. 調査に至る経緯

民生病院裏遺跡は寺沢丘陵から東に派生した標高約30mの丘陵上に位置し、周辺は開拓された沢が発達する。これまでの踏査で病院裏側の北側法面で竪穴住居跡を確認している。昭和56年に宅地造成の際削平を受け、土師器や須恵器が多数散乱した。このため発掘調査を実施し、竪穴住居跡1棟を確認した（瀧峰町教育委員会1989）。採集した土師器の中には関東系土師器が含まれていたことから注目を集めた。平成7年に山崎農村公園建設に伴う発掘調査で竪穴住居跡6棟などを確認している（註1）。

瀧峰中学校体育館は遺跡範囲から約150m離れている。体育館は老朽化のため危険建造物に指定されたことから、体育館を新築することとなった。敷地は体育館に隣接する地点が用地として候補に挙がり、文化財側からも隣接地ではなく問題はないという判断に至った。地形は南北方向にのびる痩せ尾根とその東側の南に傾斜する斜面、西側の平坦地であり、尾根は墓地として使用されていた。また、西側の平坦面は一時草地として利用されたこともあるが、現況は山林であった。

平成11年1月12日、伐採終了後念のため一部掘り下げを行ったところ南側斜面から須恵器が出土し



第16図 調査区の位置

た。そこで宮城県教育文化財保護課に遺物出土の連絡を行うとともに関係機関と協議を行い、確認調査を実施することとした。引き続き、遺構確認作業を行ったが遺構を検出できず、南側斜面の堆積層に遺物を含むことを確認したのみであったので1月21日に調査を終了した(註2)。記録は略測図の作成と文章記録を行い、一部で簡易やり方を設定し平面図(1/20)を作成した。写真記録は35mmカメラ(カラー)を用いた。整理作業は平成11、14~15年度に実施した。

3. 基本層序

基本層位は以下のとおりである。

- I層 黒褐色(10YR2/3) 粘土質シルトで根を多く含む。表土である。
- II層 黒色(10YR2/1) シルトで遺物を含む。南側斜面に存在するが、遺物を含む地点は限定される。旧表土の可能性がある。
- III層 黄褐色粘土ブロックを含む明茶褐色シルト層~地山粒含む黒褐色シルトである。南側斜面II層下に存在する。
- IV層 にぶい黄褐色(10YR4/3) シルトで、白色粒をまばらに含む。漸移層で部分的に存在する。
- V層 にぶい黄褐色(10YR5/4)~明黄褐色(10YR6/8) 粘土シルトで、本遺跡内の地山である。下層は白色粘土となる。

4. 検出した遺構と遺物

各調査地を尾根西側部分、尾根部分、尾根東側部分にわけ、概要と出土遺物について説明する。なお、現在県道により分断されるが、空中写真や地形図で検討すると県立瀬峰病院のある丘陵はここから東に派生したもので、尾根東側部分は小谷の最奥部付近になると考えている。

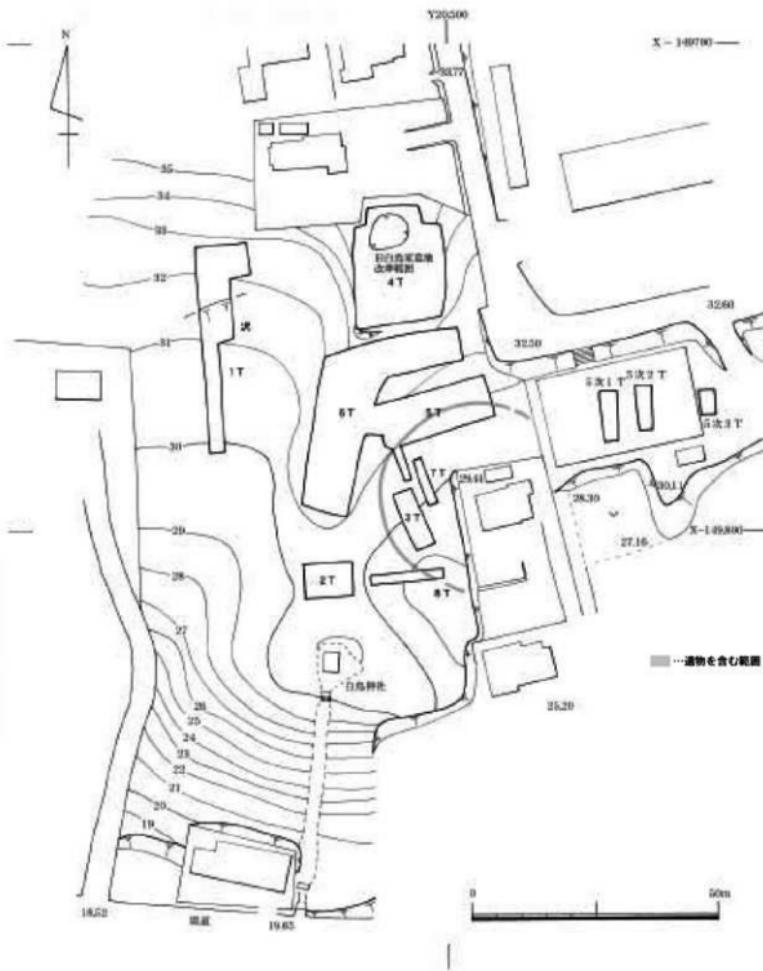
(1) 各トレーニングの概要

【尾根西側部分】調査区を1つ設けた。かつて牧草地として利用されており、北側緩斜面でI層直下でV層となることから切り土されている。平坦になった地点から約10m南側で盛土の下部より沢を検出した。沢堆積層は黒褐色粘土で、底面付近には粗砂がみられる。自然堆積である。遺物は石器1点を探集した。

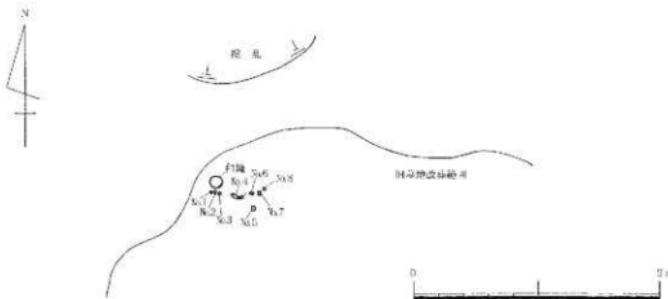
【尾根部分】調査区を3つ設けた。4Tは旧墓地付近の丘陵平坦面である。平成10年9月に墓地の改葬が行われており、改葬の平面形を確認し、古鏡、古銭がまとまって出土した(第18図)。検出面直下、搅乱された黄褐色粘土及び白色粘土層からの出土である。なお、改葬に伴う搅乱層の掘り下げは行わなかった(註3)。遺物は古鏡、古銭の他に副葬品と見られる陶磁器類の破片が出土している。

【尾根東側部分】調査区を4つ設けた。南側にゆるやかに傾斜する斜面で、遺物が出土した地点である。また、隣接する小野寺一夫氏より中学校南側の畠で探集したという須恵器甕体部破片の寄贈を受けた。V層上面で遺構確認を行ったが確認できず、II層中にのみ遺物を含むことを確認した。II層は南側斜面に面的に広がり、南側では層厚は薄くなる。3T周辺に遺物が多く見られることから、3Tを中心として中学校南側の畠までのごく狭い範囲に遺物が含まれると考えている。遺物には須恵器、

土師器、粘土塊（スサ入り）、鐵片がある。



第17図 調査区平面図



第18図 古銭出土状況平面図

(2) 出土遺物について

遺物はⅡ層や搅乱層から須恵器、土師器、赤焼き土器、陶磁器、粘土塊（スサ入り）、石器、古鏡、古銭、鉄片がテン箱1箱分が出土した。須恵器が多く、約9割を占める。ここでは特徴が判る遺物について古代と近世にわけて説明し、その他は第5表に示す。

【古代】

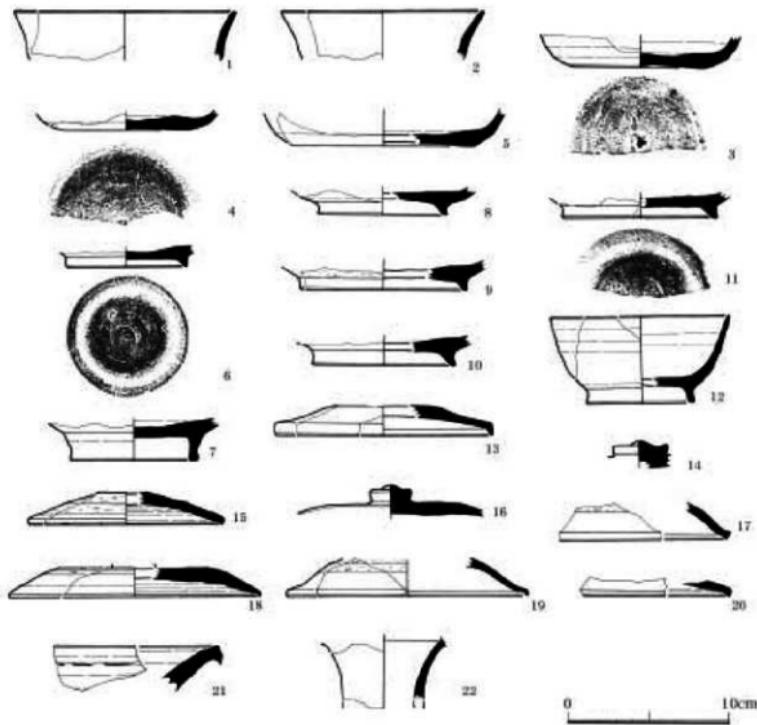
古代の遺物は須恵器、土師器、赤焼き土器がある。

須恵器には壺、高台壺、蓋、甕、壺、長頸壺などがある。完形のものはない。焼成及び胎土より2種類に大別できる。1つは暗灰褐色で硬質、もう1つは灰白色で軟質のものであり、後者が圧倒的に多い。前者は特徴から田尻町木戸窯製品（野崎準1976、辻秀人1984）のものと考えている。

第19図1～5は壺である。1、2はゆるやかに外反しながら立ち上がる。やや身が深い。3～5は底部で底径が大きく、回転ヘラ切りの後ナデによる再調整が施される。第19図6～13は高台壺である。高台が三角状を呈し、外側に踏ん張る形態のものが多い（8～11）。底部切離しはナデによる再調整のため不明なものが多い。第19図14～21は蓋である。体部には回転ヘラケズリ調整が施され、宝珠つまみをもつ。第20図1～10は甕の破片である。体部は外面平行タタキ、内面は当て具痕が見られ無文のものが多いが、青海波紋のものもある。

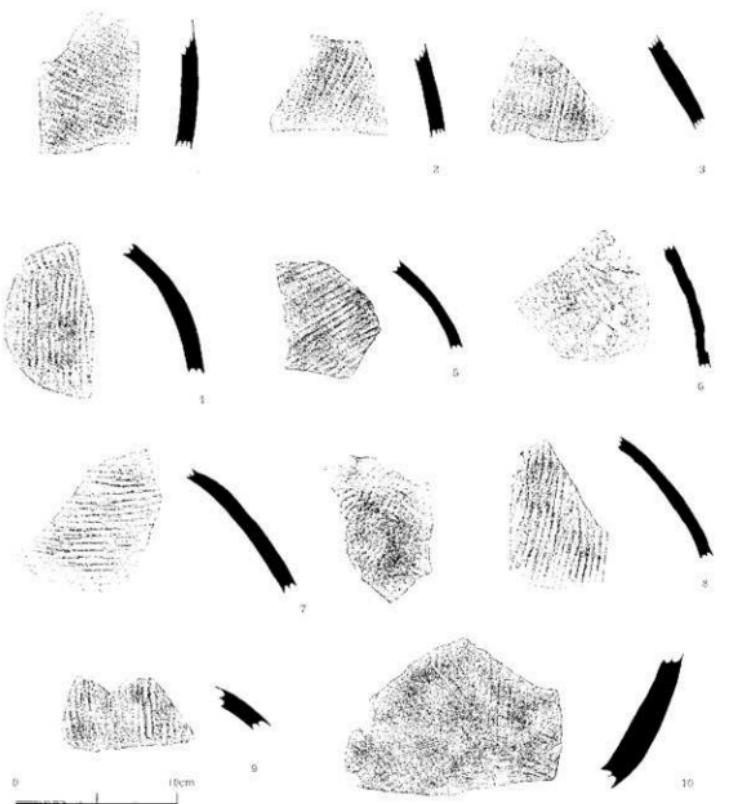
全体の器形は不明ではあるが、壺は底径が大きく再調整されることと壺蓋の形態などから大境山遺跡第3～4群土器の須恵器（瀬峰町教育委員会1983）に類似しており8世紀前葉から後半ころの年代を考えている。

土師器、赤焼き土器は小片のため図示できなかったが、いずれもロクロ調整されている。



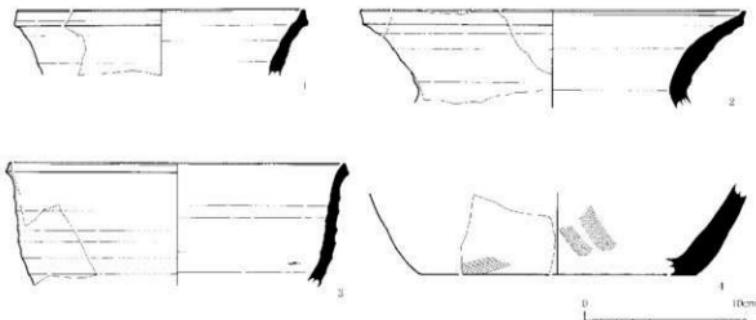
名	区	層位	遺物名	残存	断面	口径	底径	特	圖	登録
1	II層	窓櫓部	坪 体 部	-	13.8	-	-	外:ロクロナヂ、底内:ロクロナヂ、底(315/1)、内:ロクロナヂ、底(316/2)	8002	—
2	II層	窓櫓部	坪 体 部	-	12.6	-	-	外:ロクロナヂ、底(316/1)、内:ロクロナヂ、底(315/2)	8008	—
3	II層	窓櫓部	坪 底 部	-	8.4	-	-	外:ロクロナヂ、底白(317/2)、底:回転へ切りの後ナヂ、内:ロクロナヂ、水ダスク、底白(317/2)	8035	—
4	II層	窓櫓部	坪 底 部	-	7.8	-	-	外:ロクロナヂ、底白(317/1)、底:回転へ切りの後ナヂ、内:ロクロナヂ、底白(317/1)	8034	—
5	II層	窓櫓部	坪 底 部	-	11.2	-	-	外:ロクロナヂ、底(317/1)、底:回転へ切りの後ナヂ、内:ロクロナヂ、底(317/2)	8015	—
6	表塗	窓櫓部	高台坪 底 部	-	7.9	-	-	外:ロクロナヂ、底灰(318/1)、底:回転へ切りの後ナヂ、内:ロクロナヂ、底灰(318/1)	8013	—
7	3	II層	窓櫓部	高台坪 底 部	-	8.0	-	外:ロクロナヂ、底(318/1)、底:回転へ切りの後ナヂ、内:ロクロナヂ、底(318/2)	8061	—
8	3	II層	窓櫓部	高台坪 底 部	-	8.0	-	外:ロクロナヂ、底(318/1)、底:回転へ切りの後ナヂ、内:ロクロナヂ、底灰(318/2)	8061	—
9	2	II層	窓櫓部	高台坪 底 部	-	10.4	-	外:ロクロナヂの複数軋へラズリ、底灰(319/1)～底灰(319/2)、底:不明透かげ、内:ロクロナヂ、底灰(319/2)	8012	—
10	3	II層	窓櫓部	高台坪 底 部	-	8.5	-	外:ロクロナヂ、底白(317/1)、底:回転へラズリの複数軋、内:ロクロナヂ、底灰(317/2)	8014	—
11	5	II層	窓櫓部	高台坪 底 部	-	9.6	-	外:ロクロナヂ、底(318/1)、底:回転へラズリの複数軋、内:ロクロナヂ、底灰(318/2)	8035	—
12	3	II層	窓櫓部	高台坪 体 部	4.1	11.0	6.8	外:ロクロナヂ、にぶい底(317/1)、底:不明透かげ、内:ロクロナヂ、底灰(318/3)	8003	—
13	3	II層	窓櫓部	坪 体 部	13.5	-	-	外:ロクロナヂ、にぶい底(318/3)、内:ロクロナヂ、底灰(315/2)	8020	—
14	3	II層	窓櫓部	坪 直 つまみ部	-	-	-	外:ロクロナヂ、底灰(317/3)、内:ロクロナヂ、底灰(317/3)	8006	—
15	3	II層	窓櫓部	坪 体 部	12.0	-	-	外:ロクロナヂの複数軋へラズリ、底部手持へラズリ、底灰(315/5)、内:ロクロナヂ、底灰(315/4)	8064	—
16	3	II層	窓櫓部	天井 部	-	-	-	外:ロクロナヂ、にぶい底(319/3)、内:ロクロナヂ、にぶい底(319/3)	8031	—
17	3	II層	窓櫓部	坪 罐 部	-	-	-	外:ロクロナヂの複数軋へラズリ、底灰(317/1)～底灰(317/3)、内:ロクロナヂ、底灰(315/1)	8008	—
18	3	II層	窓櫓部	坪 罐 体 部	-	17.8	-	外:ロクロナヂ、底灰(318/3)、内:ロクロナヂ、底灰(315/3)	8013	—
19	3	II層	窓櫓部	坪 体 部	15.0	-	-	外:ロクロナヂ複数軋へラズリ、底灰(318/1)～底灰(318/4)、内:ロクロナヂ、底(318/4)	8007	—
20	3	II層	窓櫓部	坪 直 雜 部	-	-	-	外:ロクロナヂ、底黄褐(318/3)、内:ロクロナヂ、底黄褐(318/3)	8005	—
21	5	II層	窓櫓部	變化罐 体 部	-	-	-	外:ロクロナヂ、底(318/4)、内:ロクロナヂ、底(318/4)	8010	—
22	5	II層	窓櫓部	長頭罐 頭 部	-	-	-	外:ロクロナヂ、底(318/6)、内:ロクロナヂ、底(318/1～318/6)	8026	—

第19図 II層出土遺物(1)



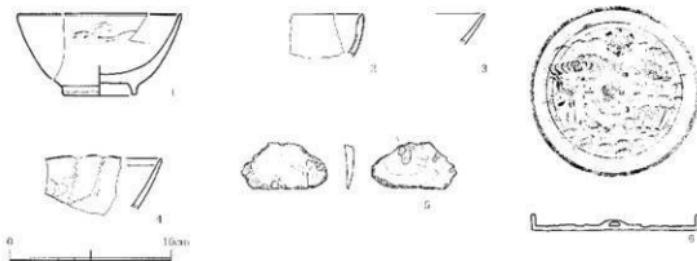
No.	区	附位	遺物名	残存	高さ	口径	底径	特徴		登録	回数
								外	内		
1	3	II層	須恵器	裏	体部	-	-	外：平行タタキ、灰 (10086/1)、内：横ナギ、灰 (G16/1)		R025	-
2	3	II層	須恵器	裏	体部	-	-	外：平行タタキ、灰 (7,5186/1)、内：ナギ、灰白 (7,517/1)		R023	-
3	3	II層	須恵器	裏	体部	-	-	外：平行タタキ、灰 (518/1)、内：横ナギ、灰 (1006/1)		R021	-
4	3	II層	須恵器	裏	体部	-	-	外：平行タタキ、灰 (1005/1)、内：押さえ瓶 (無文)、灰 (G,515/1)		R019	-
5	3	II層	須恵器	裏	体部	-	-	外：平行タタキ、灰 (7,516/1)、内：押さえ瓶 (無文)、灰 (7,516/1)		R018	-
6	3	II層	須恵器	裏	体部	-	-	外：平行タタキ、自然縫付唇、淡黄 (7,515/1)、内：剥離、灰 (516/)		R021	-
7	3	II層	須恵器	裏	体部	-	-	外：平行タタキ、灰 (515/1)、内：押さえ瓶 (青釉破綻)、暗灰 (512/)		R022	-
8	3	II層	須恵器	裏	体部	-	-	外：平行タタキ、灰 (1007/1)～赤褐 (1005/3)、内：押さえ瓶 (無文)、灰 (G,517/1)		R028	-
9	3	II層	須恵器	裏	体部	-	-	外：平行タタキ、オリーブ灰 (G18/3)、内：押さえ瓶 (無文)、灰 (1018/1)		R029	-
10	5	II層	須恵器	裏	体部	-	-	外：平行タタキ、灰 (G15/1)～灰白 (G17/1)、内：押さえ瓶 (無文)、灰 (06/)		R027	-

第20図 II層出土遺物(2)



No.	区	位	遺物名	現存	高さ	口径	底径	特	圖	色	斑
1	5	II層	須恵器	縫	口縁部	18.0	—	外:ロクロナデ, 灰 (315/1), 内:ロクロナデ, 灰白 (317/1)	8020	—	
2	3	II層	須恵器	縫	口縁部	23.5	—	外:ロクロナデ, 灰 (316/1), 内:ロクロナデ, 灰 (316/1)	8021	—	
3	3	II層	須恵器	縫	口~全体	20.8	—	外:ロクロナデ, 自然灰, 灰 (316/1), 内:ロクロナデ, 灰 (316/1)	8027	—	
4	3	II層	須恵器	縫	全体	—	17.2	外:ロクロナデナデ, 灰 (1016/1), 内:不明ナデ, 内:ロクロナデ, ナデ, 灰黄 (7, 317/1)	8029	—	

第21図 II層出土遺物(3)



No.	区	解位	遺物名	現存	高さ	口径	底径	特	圖	色	斑	
1	田園地東側	表	近世陶器	縫	3/3	5.1	10.2	外:ロクロナデ, 染付, 内:ロクロナデ, 染付	8038	T-3		
2	田園地表	表	近世陶器	縫	口縁部	—	—	外:ロクロナデ, 染付, 内:ロクロナデ, 染付	8039	—		
3	田園地東側	表	近世陶器	縫	口縁部	—	—	外:ロクロナデ, 内:ロクロナデ	8040	—		
4	田園地表	表	近世陶器	縫	口縁部	—	—	外:ロクロナデ, 染付, 内:ロクロナデ, 染付, 滲き織ざによる補修痕跡	8041	T-4		
5	1	丁表	石製品	新	片	石の種類: 花崗岩, 長さ: 3.6, 幅: 1.4, 厚さ: 0.3	—	—	—	8042	—	
6	田園地	改修時の廃土堆	金属製品	縫	長さ: 10.6, 索の厚さ: 1.6, つまみの厚さ: 0.7, その他の厚さ: 0.3, 索表面側に和紙と木が付着	—	—	—	8043	T-12		

第22図 遺構外出土遺物

【近世】

近世の遺物には和鏡、古銭、陶磁器がある。

和鏡は直角式高縁、中線二重圓線がめぐらされる円鏡である。鏡背の文様は亀形紐の上部に菊花文、左下に鶴1羽が描かれる。瀬峰町下藤沢II遺跡第2号墓(瀬峰町教育委員会1988)出土和鏡に類似があり、江戸時代のものである。縁に一部墨書きされたと見られる紙片を確認でき(図版7-2)、鏡面には木質が若干付着する。このことから、文字が書かれた紙片で鏡を包んで副葬した可能性を考えている。木質は棺材を鏡を入れた箱の可能性がある。このような例は血盆経を記載した紙で包んで副葬したとされる下藤沢II遺跡22号墓出土鏡や木箱に納められたとされる下藤沢II遺跡2号墓出土鏡(瀬峰町

教育委員会1988)があるが、改葬された搅乱土中の出土であり詳細は知り得ないことから、上記の状況で副葬された可能性を指摘するにとどめる。

古銭は錆着や縫のものが10点あり、9点の取り外しを行った。古銭は4種、209枚を確認した。詳細は第23~27図及び第6、7表に示す。これらは改葬された搅乱土中の出土のため一括性は低いが、縫の状態で出土していることからある程度の組み合わせを伺い知ることができる。確認できた銭種は次のとおりである。

古寛永通寶 (初鋲 1636年) 新寛永通寶一文銭 (初鋲 1668年)

新寛永通寶無文銭 (初鋲 1673年) 新寛永通寶背佐銭 (初鋲 1714年)

縫の状況をとどめるものや錆着したものと同時に埋納されたセットと考えると、その組み合わせは第4表のようになる。

取り上げNo	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.8A	No.8B	No.8C	No.9B	No.9C	No.9D	No.10	枚数
古 寛 永 銭	3	0	9	0	0	7	0	0	1	0	2	2	15
一 文 銭	14	15	47	16	12	16	11	2	14	3	0	0	158
無 文 銭	0	2	4	0	0	1	1	1	2	0	2	2	15
新 寛 永 銭	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3
枚 数	17	20	53	16	15	24	12	3	17	5	4	4	191

第4表 古銭のセット関係

いずれも新寛永通寶を含むことから、17世紀第4四半期以降に副葬されたものであり、No.4、6、7では正徳4年(1714)以降に鋳造されたとみられる新寛永通寶背佐銭を含むことから18世紀初頭以降のものである。下藤沢II遺跡(瀬峰町教育委員会1988、阿部正光・佐藤敏幸1997)での古銭のセット関係を参考にすると17世紀末葉~18世紀後葉頃のもの(第3~4段階)に該当するが、近世墓標との関係は不明で廐からの出土であるため、上記のようなセット関係を持つことを指摘するにとどめたい。

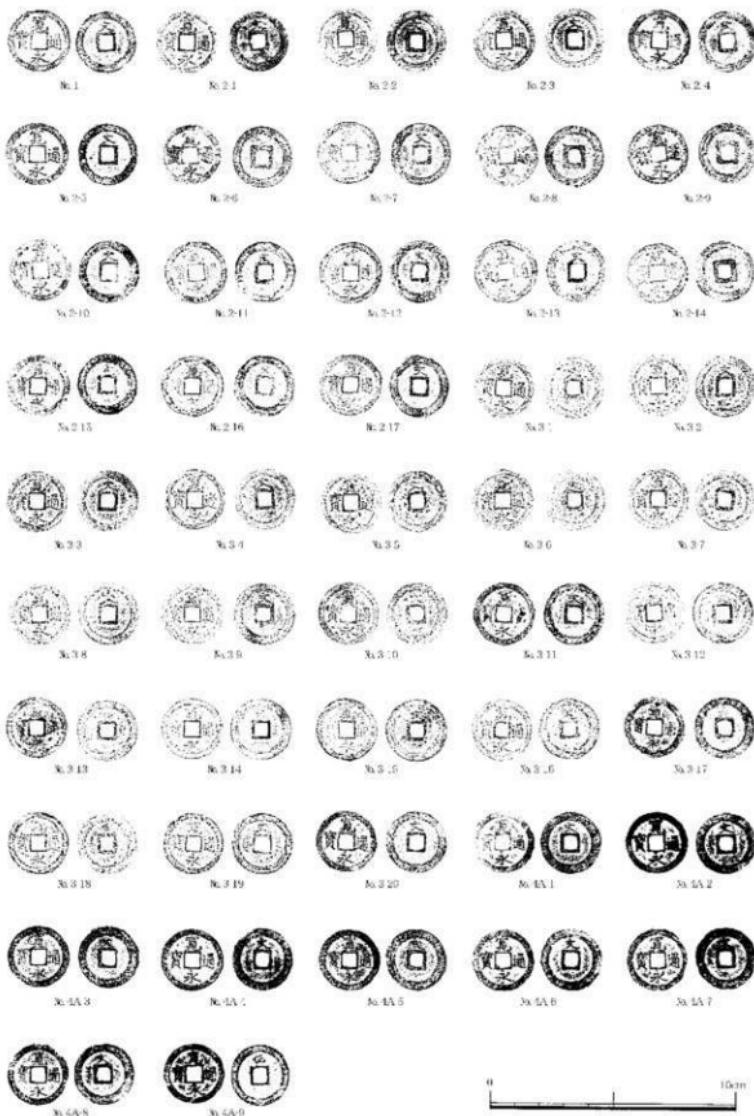
第22図4は破損した部分を修復のため焼継した磁器碗である。

	土 壤 錠			頭 直 錠			赤焼き土錠			不 明	土製品	鉄製品
	环-高台环	直-直	不 明	环-高台环	环- 直	直- 直	不 明	环				
3 T	0	1	0	30	11	20	1	0	0	1	0	0
3+5 T	1	2	0	1	3	5	0	1	1	0	1	1
5 T	0	2	0	7	0	4	1	0	0	1	0	0
直 錠	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0
合 计	1	6	4	29	14	29	2	1	1	2	1	1

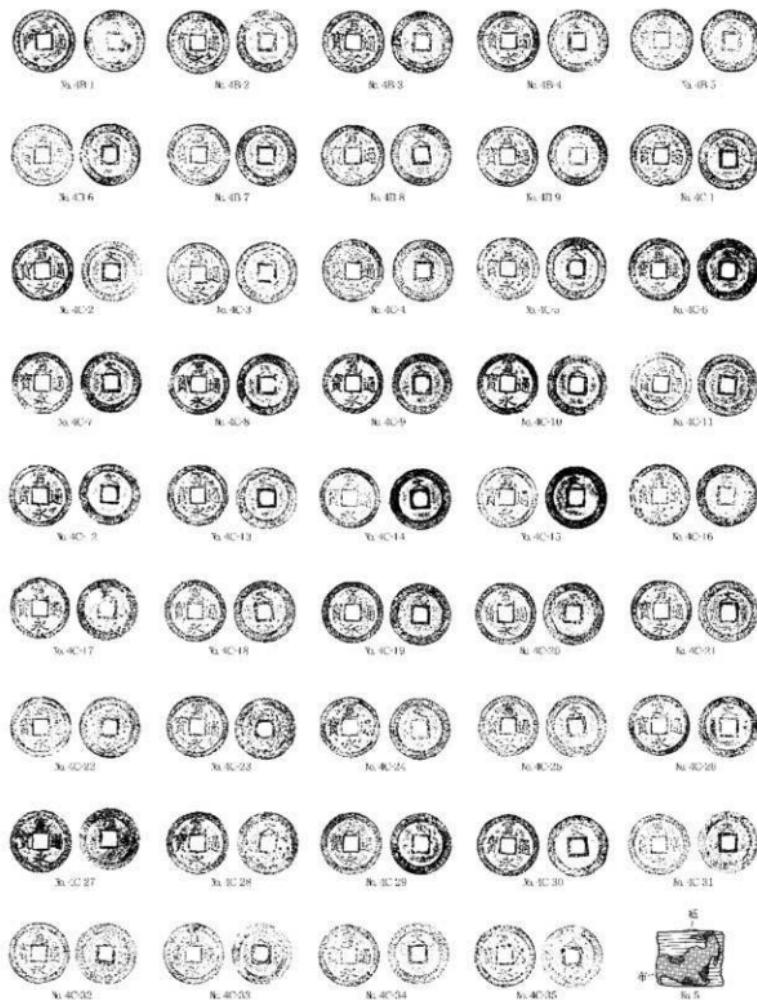
第5表 出土遺物集計表

5. まとめ

- (1) 調査地点の南側斜面付近は、現在県道により分断されているが寺沢丘陵に入る開析小谷の最奥部分に当たる。
- (2) 遺構は検出できないため、集落はこの地点には広がっていない。今回出土した遺物については8世紀前葉から後半が主体である。
- (3) 改葬された墓地の廐から古鏡、古銭が出土した。墓標と墓坑の関係や墓坑内の副葬品の組み合わせは不明ながら、古銭が縫の状態や錆着した状態で出土したため、古銭のセット関係をうかがい知ることができる。また、鏡には文字を書いた紙が付着していた。

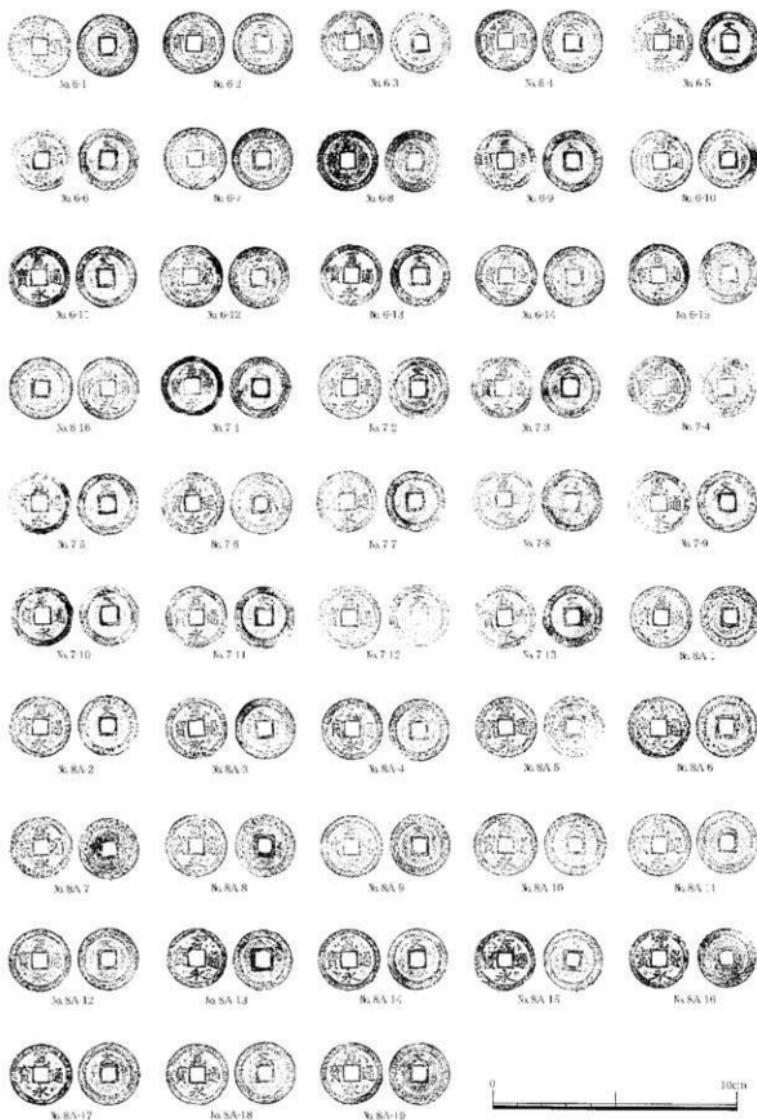


第23図 白鳥家墓地出土古銭(1)

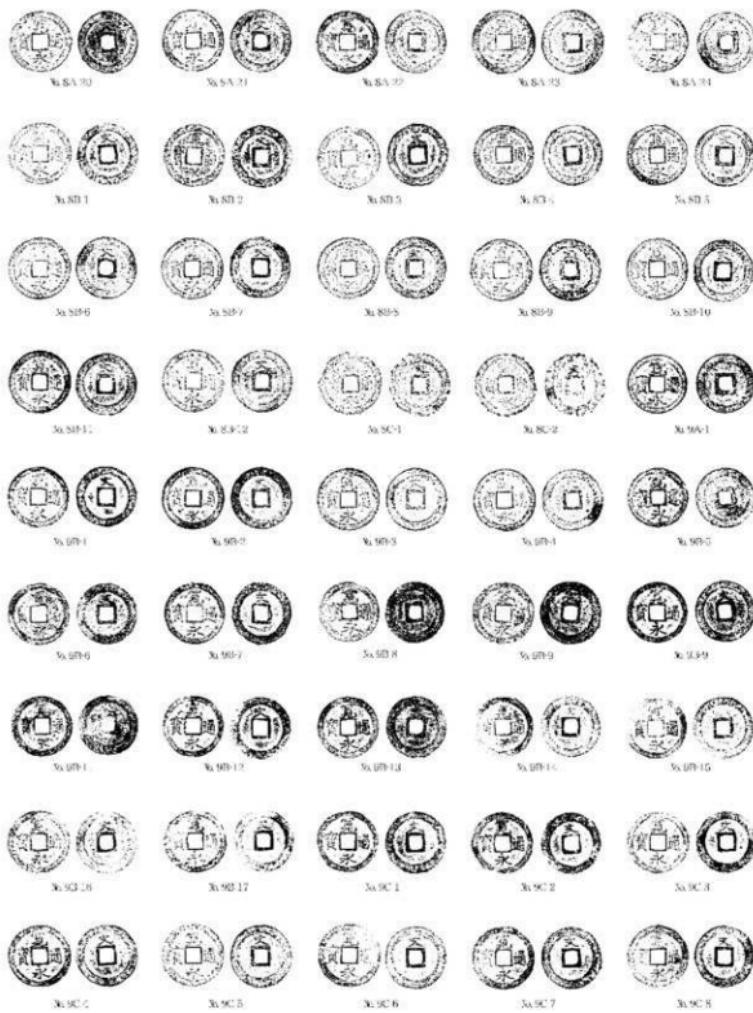


0 1 10cm

第24図 白鳥家墓地出土古銭(2)



第25図 白鳥家墓地出土古銭(3)



第26図 白烏家墓地出土古銭(4)

V. 民生病院裏遺跡第3次調査

No.	銭No.	登録	銭種	背文	初期年	径深	内径	厚	日程	備考	No.	銭No.	登録	銭種	背文	初期年	径深	内径	厚	日程	備考	
4	153	新銭文	文	1668	2.53	2.03	0.12	3.0			B 9	197	新銭文	文	1668	2.52	2.00	0.15	4.2			
5	156	新銭文	文	1668	2.57	2.03	0.13	3.1			B 10	198	新銭文	文	1668	2.51	1.97	0.15	3.3			
6	157	新銭文	文	1668	2.54	2.01	0.13	3.1			B 11	199	新銭文	文	1668	2.52	1.99	0.14	3.6			
7	158	新銭文	文	1668	2.53	2.00	0.13	3.5			B 12	200	新銭文	文	1668	2.55	2.01	0.14	4.1			
8	159	新銭文	文	1714	2.55	2.00	0.12	3.2	佐渡國		C 1	201	新銭文	文	1668	2.56	2.11	0.15	3.7		縫で覆わ れ、一括	
9	160	新銭文	文	1668	2.56	2.01	0.15	4.3			C 2	202	新銭文	文	1668	2.53	1.93	0.16	3.7			
10	161	新銭文	文	1668	2.52	2.07	0.14	3.5			C 3	203	新銭文	文	1673	—	—	—	—	顧問 顧問不可		
11	162	新銭文	文	1668	2.55	2.02	0.16	3.9			A 1	204	古銭文	文	1626	2.49	1.91	0.14	3.7		研究の一部	
12	163	新銭文	文	1668	2.54	2.13	0.13	3.7			B 1	205	新銭文	文	1668	2.49	1.99	0.15	3.1		研究不明	
13	164	新銭文	文	1668	2.54	2.02	0.12	3.1			B 2	206	新銭文	文	1668	2.42	1.98	0.14	3.7		でござらば らくなつて め、不明	
Na. 7	A 1	165	新銭文	文	1668	2.48	1.93	0.18	5.2			B 3	207	新銭文	文	1668	2.52	1.91	0.14	3.8		
	A 2	166	新銭文	文	1668	1.48	1.99	0.16	3.1			B 4	208	新銭文	文	1668	2.54	1.97	0.13	3		
	A 3	167	新銭文	文	1668	2.41	2.02	0.14	3.6			B 5	209	新銭文	文	1673	2.46	1.96	0.16	3.9		
	A 4	168	新銭文	文	1668	2.50	1.95	0.15	3.1			B 6	210	新銭文	文	1668	2.53	1.99	0.12	3.4		
	A 5	169	古銭文	文	1630	2.50	1.91	0.12	3.7			B 7	211	新銭文	文	1668	2.54	2.00	0.12	3.8		
Na. 8	A 6	170	古銭文	文	1630	2.53	1.97	0.14	3.7			B 8	212	古銭文	文	1630	2.47	1.89	0.14	4.2		
	A 7	171	古銭文	文	1630	2.54	1.92	0.14	3.3			B 9	213	新銭文	文	1668	2.52	1.94	0.12	3.7		
	A 8	172	古銭文	文	1630	2.50	1.93	0.12	3.1			B 10	214	新銭文	文	1668	2.5	2.00	0.18	3.7		
	A 9	173	新銭文	文	1668	2.52	1.93	0.14	4.5			B 11	215	新銭文	文	1668	2.49	2.06	0.12	5.5		
	A 10	174	新銭文	文	1668	2.55	2.01	0.16	4.3			B 12	216	新銭文	文	1668	2.52	2.03	0.15	5.5		
	A 11	175	新銭文	文	1668	2.54	2.01	0.13	3.3			B 13	217	新銭文	文	1673	2.55	2.06	0.12	3.4		
	A 12	176	新銭文	文	1668	2.52	1.97	0.14	3.7			B 14	218	新銭文	文	1668	2.52	2.02	0.12	3.5		
	A 13	177	新銭文	文	1668	2.51	1.98	0.14	3.2			B 15	219	新銭文	文	1673	2.5	2.01	0.15	3.5		
	A 14	178	新銭文	文	1668	2.50	1.92	0.12	3.3			B 16	220	新銭文	文	1668	2.55	2.07	0.15	3.6		
Na. 9	A 15	179	新銭文	文	1673	2.52	1.98	0.15	3.5			B 17	221	新銭文	文	1668	2.49	2.07	0.15	3.5		
	A 16	180	古銭文	文	1630	2.5	2.05	0.16	4.1			C 1	222	新銭文	文	1668	2.55	2.05	0.15	3.8		
	A 17	181	新銭文	文	1668	2.55	2.00	0.16	4.0			C 2	223	新銭文	文	1668	2.56	1.89	0.19	4.2		
	A 18	182	新銭文	文	1668	2.55	1.97	0.18	5.6			C 3	224	新銭文	文	1668	2.51	1.86	0.16	3.7		
	A 19	183	新銭文	文	1668	2.55	1.99	0.11	3.1			C 4	225	新銭文	文	1668	2.55	2.02	0.12	3.1		
	A 20	184	新銭文	文	1668	2.51	1.92	0.13	3.1	佐渡國		C 5	226	新銭文	文	1668	2.54	1.86	0.15	3.4		
	A 21	185	新銭文	文	1668	2.54	1.99	0.17	4.6			C 6	227	新銭文	文	1668	2.57	2.03	0.14	3.4		
	A 22	186	新銭文	文	1668	2.55	1.99	0.16	4.1			C 7	228	新銭文	文	1668	2.52	1.86	0.16	3.4		
	A 23	187	新銭文	文	1673	2.58	1.97	0.11	3.9			C 8	229	新銭文	文	1668	2.56	1.95	0.14	3.8		
	A 24	188	古銭文	文	1630	2.48	1.95	0.14	3.1	附註	D 1	230	新銭文	文	1673	2.54	2.06	0.11	3.5			
Na. 10	B 1	189	新銭文	文	1668	2.55	1.98	0.13	3.1	縫で覆わ れ、一括		D 2	231	古銭文	文	1630	2.48	1.91	0.12	3.7		
	B 2	190	新銭文	文	1668	2.53	1.95	0.15	3.9			D 3	232	新銭文	文	1673	2.54	2.06	0.12	3.6		
	B 3	191	新銭文	文	1668	2.45	2.01	0.11	3.1			D 4	233	古銭文	文	1630	2.52	1.92	0.13	3.3		
	B 4	192	新銭文	文	1673	2.48	1.95	0.16	3.9			D 5	234	新銭文	文	1673	2.55	1.97	0.11	3.3		
	B 5	193	新銭文	文	1668	2.53	1.99	0.16	4.3			D 6	235	新銭文	文	1673	2.56	2.04	0.10	7.4	11枚にわたって いるが、断続的	
	B 6	194	新銭文	文	1668	2.54	2.00	0.11	3.8			D 7	236	新銭文	文	1673	2.28	1.88	0.10	2.1	1枚づつ、断続的	
	B 7	195	新銭文	文	1668	2.54	2.03	0.11	3.1			D 8	237	新銭文	文	1673	2.32	1.85	0.12	3.1	1枚づつ、断続的	
	B 8	196	新銭文	文	1668	2.52	2.01	0.11	3.5			D 9	238	新銭文	文	1673	2.20	1.72	0.12	2.3	1枚づつ、断続的	

第7表 古銭觀察表(2)

註

- 註1 未報告資料である。調査内容の一部は漸峰町教育委員会1996で紹介している。
- 註2 その後、平成11年1月30日付で遺跡範囲の変更(拡大)を行った。
- 註3 改革のため既に構造はないと思定していたが、2月21日に工事現場を訪れた際北壁付近に墓坑の断面を4基確認した。いくつかは改築が底面まで達しているものもあったが、一部残存するものを確認した(図版7、中央)。

引用文献

- 阿部正光・佐藤敏幸 1997『宮城県の近世墓と六道銭』『近世の出土銭I -論考編-』兵庫埋蔵銭調査会
漸峰町教育委員会 1983『大境山遺跡』漸峰町文化財調査報告書第4集
漸峰町教育委員会 1988『下藤沢II遺跡』漸峰町文化財調査報告書第6集
漸峰町教育委員会 1989『民生病院裏遺跡』漸峰町文化財調査報告書第7集
漸峰町教育委員会 1999『堅穴住居跡・畠などを検出 民生病院裏遺跡』『広報せみね』No. 338 漸峰町
辻 秀人 1984『東北の横穴と須恵器』『宮城の研究』第1巻 清文堂
野崎 勝 1976『東北地方における須恵器生産』『東北学院大学東北文化研究所研究紀要』第6集 42~62頁 東北学院大学東北文化研究所研
兵庫埋蔵銭調査会 1996『日本出土銭総覧』 1996年版

遠景（北より）

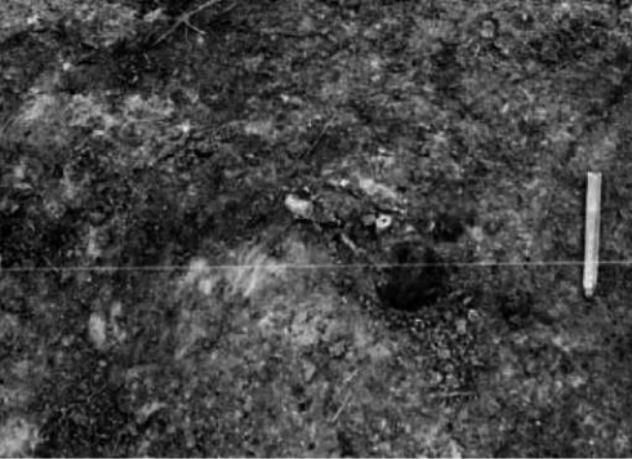


3 T 調査風景（南より）



5 T 基本層序（東より）





古鏡・古銭出土状況



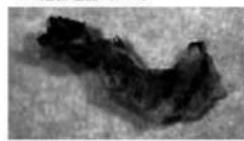
近世墓の断面（南より）



1. 鏡 (R043)



3. 近世磁器 (R038)



2. 鏡に付着していた和紙



4. 近世磁器 (R041)

近世墓出土遺物

図版 7

VI. 民生病院裏遺跡第4次調査

1. 要項

【遺跡名】	民生病院裏遺跡（遺跡登載番号：46036）	【調査原因】	下水管管理設に伴う工事立ち会い
【遺跡所在地】	栗原郡瀬峰町藤沢字下田地内	【調査面積】	約94.4m ²
【調査期間】	平成12年3月10日	【調査担当者】	瀬峰町教育委員会社会教育課主事 安達訓仁
【調査主体者】	瀬峰町教育委員会教育長 及川秀美	【調査協力】	宮城県教育庁文化財保護課、瀬峰町建設課、御佐々木工務所

2. 調査に至る経緯

平成12年1月31日、瀬峰町建設課より瀬峰町藤沢字下田地内で下水道工事計画があるとの連絡が入った。対象地は民生病院裏遺跡の範囲内である。すでに削平を受けているが第1次調査地点、第2次調査地点に隣接し、特に第2次調査（未報告、瀬峰町教育委員会1996）では標高の高い付近でも遺構が残存していたことから、対象地内でも遺構が存在する可能性が高いと考えた。そこで宮城県教育庁文化財保護課、瀬峰町建設課、瀬峰町教育委員会で協議を行い、工事立ち会いを実施することとした。工事立ち会いは3月10日に実施した。初めに舗装盤を除去し、II層上面で遺構検出を行った結果土坑1基を検出したため、任意の基準点を設置し、各種記録（1/20の平面図、断面図）の作成し写真撮影（35mm カラー）を行った。



第28図 調査区の位置

3. 基本層序

舗装盤（I層、層厚約5cm）の直下で黄褐色粘土質シルト（II層、地山）となる。旧表土は削平を受け残存しない。斜面下部でコンクリート片を含む盛土を確認した。

4. 検出した遺構と遺物

検出した遺構は土坑1基である。堆積層に焼土や炭化物を含むことから住居跡に関わる施設の可能性も考慮し周辺の精査を行ったが、遺構は検出できなかった。

(1) 土坑と出土遺物

1号土坑

[平面形] 隅丸方形。

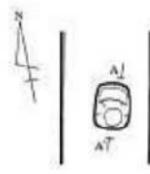
[規模] 長軸0.44m、短軸0.34m。

[壁] II層。底面よりやや急に立ち上がる。0.10mで残存。

[底面] II層。底面は段状で南側が窪む。

[堆積土] 大別1層。自然堆積。地山土、炭化粒、焼土粒をまばらに含む。

[出土遺物] 遺物は出土していない。



No.	土色	土性	層入物
1	にじいろ(褐色) (10YR 4/3)	粘土	燒土粒、炭化物をまばらに含む、自然堆積
2	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト質粘土	燒土粒、炭化物を含み、下部に地山土を含む、自然堆積

第29図 1号土坑

5.まとめ

工事立ち会いの結果、土坑1基を検出した。遺物が出土しなかったため、詳細な時期や性格は不明である。隣接する第1、2次調査区では、奈良から平安時代の遺構を確認していることから、1号土坑についても奈良・平安時代のものと考えている。遺物が出土しなかったため、性格は不明である。

引用参考文献

瀬峰町教育委員会 1996 「豊穴住居跡、畠などを検出 民生病院裏遺跡」『広報せみね』No.338 瀬峰町



立ち合い地点遠景（北より）



1号土坑（西より）

VII. 岩石 I 遺跡第4次調査

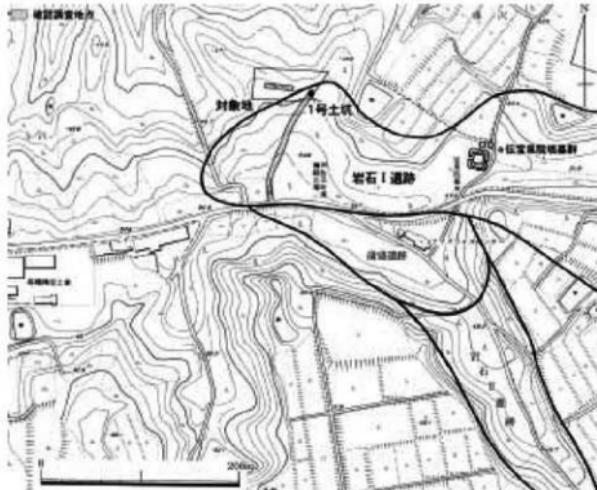
1. 要項

[遺跡名] 岩石 I 遺跡 (宮城県遺跡登録番号: 46017)	[調査原因] 農業施設建築造成(畜舎・堆肥場)に伴う確認調柶
[所在地] 宮城県栗原郡瀬峰町大里字富寺浦137-7	[調査面積] 700m ²
[調査期間] 平成15年4月30日	[地権者] 佐々木久一
[調査主体] 瀬峰町教育委員会教育長 濱田利昭	[調査担当] 瀬峰町教育委員会社会教育課主任 安達訓仁
[調査参加者] 高橋崇行 幸田信生	[調査協力] 後藤秀一、柳沢和明 (宮城県教育庁文化財保護課)

2. 調査に至る経緯

岩石 I 遺跡は標高約50m前後の寺沢丘陵中央付近に位置する。遺跡は『栗原郡藤里村誌』上巻(鈴木玄雄1922)や『瀬峰町史』(概要照1966)にも紹介されており、瀬峰町内では早い段階で知られていた遺跡である。昭和50年、瀬峰町で初めて発掘調柶が行われた遺跡であり(瀬峰町教育委員会1977)、その後、昭和52年(瀬峰町教育委員会1980)、昭和60年(瀬峰町教育委員会1985)にも発掘調柶を実施している。また、昭和30年から40年代の草地、田地、畑地などの造成により多くの遺物が出土し、採集された遺物の一部が紹介されている(瀬峰町教育委員会1977)。特に遺跡中央の丘陵頂上付近では蘇手刀が採集され、切り子玉も出土したという(註1)。

平成15年3月13日、瀬峰町産業課より農業用施設(畜舎、堆肥場)建設計画の申請があるとの連絡を受けた。対象地は岩石 I 遺跡の範囲内に含まれることから現地踏柶を行うとともに、早速事業者の佐々木久一氏と連絡をとり3月14日に協議を行った。計画は面積2,500m²であり、大部分は盛土を行



第30図 調査区の位置

い、切土は乗り入れ部分のみであった。現地踏査ではすでに削平を受け、隣接の旧地形が残存する地点より0.4～0.8mほど下がっており、遺物の散布は見られなかった。面積が広いことから切土部分を中心に確認調査を実施することで協議を行った。その後、3月18日付けで協議書、4月7日付けで埋蔵文化財発掘の届け出の提出があった。

確認調査は4月30日に実施した。切り土工地点では遺構は確認されず、盛土される地点で土坑1基を確認した。年代や性格を確認するため遺構の半分を掘り下げた。また、盛土地点中央付近では沢を確認したが、遺物が含まれないことから掘り下げを中止し、記録を作成し作業を終了した。記録は簡易やり方を設定し1/20の平面図、断面図を作成し、写真記録は35mm（カラー）で行った。

3. 基本層序

対象地区は昭和40年代の草地造成により大きく削平を受ける。一部に堆肥や盛土が認められたが層厚約2～5cmほどのしまりのないⅡ層に類似し植物の根を多く含む表土（I層）を除去すると、地山（Ⅱ層）となる。Ⅱ層は黄褐色粘土や灰白色粘土など各地点で異なる。

4. 検出した遺構と遺物

（1）土坑と出土遺物

1号土坑

〔確認面〕 Ⅱ層上面。

〔位置〕 基準杭 K 3 (X-148601, 654, Y18635, 897) の1m北付近。

〔平面形〕 圓丸長方形。

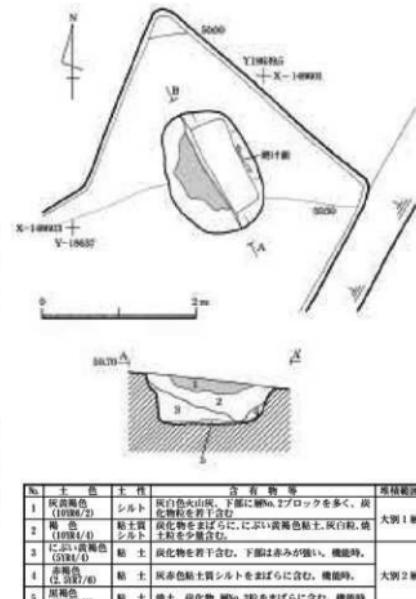
〔規模〕 長軸1.7m、短軸1.2m。

〔壁〕 Ⅱ層。高さ0.70m（東辺）。ほぼ垂直に立ち上がる。北辺中央付近で幅45cmほど、高さ20cmほどの範囲で火を受けた痕跡が認められた。

〔底面〕 Ⅱ層。ほぼ平坦。底面に火を受けた痕跡は認められない。

〔堆積層〕 大別2層。上層（層No. 1, 2）は自然堆積。層No. 1は灰白色火山灰の2次堆積層である。下層（層No. 3～5）は炭化物、焼土を含み、底面付近の層No. 5に炭化物が顕著に見られる。機能時。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



第31図 1号土坑

5. まとめ

調査の結果、土坑1基を確認した。土坑の特徴は、上面では崩落のため梢円形だが、底面では隅丸長方形である。堆積層に多くの炭化物を含む。特に機能時の堆積層に顕著に認められた。壁面にのみ火を受けた痕跡があり、火を用いた何らかの作業が行われたものと考えている。しかし、遺構内からの遺物がないことから具体的にどのような作業が行われたかは不明である。年代は上層に灰白色火山灰層が堆積していたことから10世紀前葉以前に機能したものである。

古代の遺構で類似したものに大境山遺跡1～3、5～7、11、17、19、20、24、28、41～43、45、46号小竪穴遺構（瀬峰町教育委員会1983）、長者原II遺跡焼土遺構（瀬峰町教育委員会1979）、2号小竪穴遺構（未報告、瀬峰町教育委員会1988）があるが、具体的な機能や性格は不明である。

なお、これまで岩石I遺跡の発掘調査は南側斜面がその対象となっていたが、今回の調査で丘陵の北側斜面にも遺構が分布することを確認できた。南側斜面では竪穴住居跡、掘立柱建物跡を確認しているが、北側斜面の様相は不明である。周辺での踏査や確認調査の実施により遺跡範囲や内容を確認することが今後の課題と考えている。

註

註 瀬峰町教育委員会1977、9頁。蘇手刀は瀬峰町教育委員会で保管している。

参考引用文献

- 阿部正光・赤沢清章 1982「瀬峰町大里字富前盛出土の蔵骨器、および骨片」『瀬峰町の文化財』第3集 6～9頁 瀬峰町教育委員会
- 鈴木玄雄 1922「栗原郡藤里村誌」上巻 栗原郡藤里村誌編纂委員会
- 瀬峰町教育委員会 1977「がんげつ遺跡—平安時代の竪穴遺構の調査—」瀬峰町文化財調査報告書第1集
- 瀬峰町教育委員会 1979「長者原II遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第2集
- 瀬峰町教育委員会 1980「がんげつ遺跡第2次調査報告書」瀬峰町文化財調査報告書第3集
- 瀬峰町教育委員会 1983「大境山遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第4集
- 瀬峰町教育委員会 1985「がんげつI遺跡第3次調査」瀬峰町文化財調査報告書第5集
- 瀬峰町教育委員会 1988「長者原II遺跡第2次調査」昭和63年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨
- 横 要照 1966「宮城県瀬峰町の古代遺跡について」『瀬峰町史(全)』瀬峰町



1号土坑（北より）



1号土坑壁の焼け面状況(南より)



沼掘り下げ状況（西より）

VIII. 長者原I遺跡第3次調査

1. 調査要項

【遺跡名】長者原I遺跡（遺跡登載番号：16024）	【調査原因】個人住宅建て替えに伴う工事立ち会い
【遺跡所在地】栗原郡瀬峰町藤沢字長者原1-43、大里字富清水山34-16、18	
【調査期間】平成15年7月5、6日	【調査面積】210m ²
【地権者】小野寺秀壽、小野寺淳	【調査主体者】瀬峰町教育委員会教育長 濱田利昭
【調査担当者】瀬峰町教育委員会社会教育課主事 安達訓仁	【調査協力】宮城県教育庁文化財保護課、株タカハシ住建

2. 調査に至る経緯

平成15年6月10日、株タカハシ住建より瀬峰町大里字富清水山、藤沢字長者原地内で個人住宅の建て替え計画についての協議があった。位置や事業内容の確認を行ったところ長者原I遺跡に隣接する地点であることが判明した。周辺では平成15年3月に下水管付設に伴い工事立ち会いを実施していたが遺構は検出しておらず、また、周辺の地形から既に削平を受けていると予想した。そこで、工事立ち会いにより遺構、遺物の有無の確認を行うことで協議を行い、平成15年6月17日で協議書、平成15年6月30日で埋蔵文化財発掘の届け出が提出された。

作業は旧建物の撤去時に立ち会いを行い、遺物が散布しないことを確認し、7月5日に基礎掘削の際立ち会いを行った。西側に傾斜するという地形的な要因から東側では約10cmほどでⅡ層が露出し、西側では逆にⅠ層上に盛土が行われる。旧建物による搅乱があったが、土坑1基を確認することができた。土坑は基礎掘削による削平を受けないことが判明したので堆積層の半分のみを掘り下げた。遺物が出土しないことと底面までの深いことが予想されたことから約50cmほど掘り下げた段階で停止し、各種図面、写真記録の作成を行った。また、7月6日には建物縁辺をさらに20cmほど掘り下げることから掘削の際立ち会いを行い、工事範囲の中央付近から西側でⅠ層を確認し、西側ではⅠ層内で掘削がおさまることを確認した。記録は1/20の平面図、断面図を作成し、写真記録は35mm（カラー）を用いた。

3. 基本層序

削平を受けていることから、旧表土は確認できなかった。Ⅰ層である暗灰黄色（2.5Y 4/2）粘土は宅地造成時の整地層であり、直下



第32図 調査区の位置



第33図 調査区平面図

で地山である橙色粘土（II層）となる。

4. 検出した遺構と遺物

(1) 土坑と出土遺物

2号土坑

[位 置] 調査区北側中央。

[確認面] II層。

[重 複] なし。一部水道管などにより搅乱を受ける。

[規 模] 長軸1.35m、短軸1.25m。

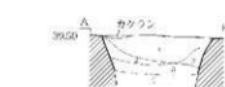
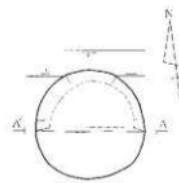
[平面形] 円形。

[壁] II層。ほぼ垂直に立ち上がる。深さ約50cm以上。

[底 面] 完掘を行なっていないため不明。

[堆積層] 大別1層。自然堆積。非常にかたくしまる。

[出土遺物] 遺物は出土していない。



No.	生 鮮	土 性	含 有 物	堆積層
1	にぶい黄褐色 (10YR 4/3)	粘土質 シルト	かたい	
2	にぶい黄褐色 (10YR 4/2)	粘土質 シルト	細かい地山粉を含む。かた い。	大別1層
3	にぶい黄褐色 (10YR 4/2)	粘土質 シルト	地山ブロック、地山粉を多く含 む。かたい。	
4	以下、未調査のため不明			

第34図 2号土坑

5. まとめ

調査の結果、土坑1基を確認することができた。遺物の出土がなく、時期は不明である。周辺での遺構の分布状況を見ると、平成14年度に水道管布設および下水管付設に伴う工事立ち会いの際、丘陵尾根に沿うように約30m間隔で上層がかたく締まる土坑を確認している。掘り下げを行った1基では底面で杭の痕跡を確認したことから縄文時代の落とし穴の可能性がある。しかし、いずれも工事立ち会いでの確認であり、掘り下げをほとんど行っていないことから断定することはできていない。今後周辺での調査をまって検討していきたいと考える。

2号土坑検出状況（南より）



2号土坑断面（北より）



IX. 桃生田前遺跡第3・4次調査（水道・下水工事立ち会い）

1. 要 項

【遺跡名】桃生田前遺跡（宮城県遺跡登載番号：46048）【調査原因】水道管付設及び下水管埋設に伴う工事立ち会い
 【所在地】栗原郡瀬峰町大里字富桃生田前地内
 【対象面積】水道 66m² 下水160m²
 【調査期間】3次 平成14年5月1日～6月5日、4次 平成15年5月27日～9月26日
 【調査主体】瀬峰町教育委員会教育長 濱田利昭
 【調査担当者】瀬峰町教育委員会社会教育課主事 安達訓仁
 【調査協力】宮城県教育庁文化財保護課、瀬峰町上下水道課、森佐々貞土建、柳佐々木工務所

2. 工事立ち会いの概要

桃生田前遺跡は、小山田川北岸の標高約6mの微高地に位置する。昭和55年、宅地造成中に柱材を持つ建物が発見された。平成9・11年度には県営ほ場整備事業に伴う事前調査を実施し、古代から中世の遺構や遺物を発見している（瀬峰町教育委員会2000）。

平成14年度に上水道管の埋設、平成15年度に下水道管埋設が計画されたため、工事の際に立ち会いを実施した。立ち会いは基本的に断面観察で行い、遺構を確認した後は平面的に確認を行っている。掘削幅は上水道管では約0.7m、下水道管では約1.1mである。

3. 基本層序

舗装盤（砂利層、盛土層、層厚約40cm）下部で基本層（1層は褐灰色（10YR5/1）シルト、層厚約20cm、2層黒色（10YR2/1）粘土、層厚約10cm）、微高地の東端と西端で砂層を確認した。西側では近世以降の旧河川下部、地表下約2mで灰白色火山灰粒が2次堆積する古代の旧河川か湿地状の堆積層を確認した。

4. 確認した遺構と遺物

検出した遺構の概要を表で示し、古代の遺構や土坑は個別に報告する。遺構全体の規模は不明なものが多く、出土遺物がほとんどないため明確な時期が分かることは少ない。なお、報告にあたり町道部分をA地点、個人宅地への接続する部分をB地点とする。

遺構名	検出面	平面形	方 向	規 模（上幅、深さ）	堆 構 特	施 作
63号溝跡 地山面	—	南北	0.20m～0.90m、0.15m	黄褐色砂質シルト	A地点	
64号溝跡 地山面	—	南北	0.0m、0.13m	黒褐色粘土質シルト	A地点、基本耐日膜（黒褐色粘土質シルト）から剥離込み	
65号溝跡 地山面	—	東西	0.0m、0.25m	褐灰色	B地点	
66号土坑 地山面 突丸方形	—	0.0m～0.50m以上、0.31m	上解抜き取り痕跡、下解取り方埋土	日燃土、下解上面で径12～15cm、厚さ5cmの柱痕跡	B地点	
67号土坑 地山面	—	東西	1.90m、0.3m	—	B地点、2時間	
68号土坑 地山面	—	—	1.20m、0.71m以上	褐褐色粘土質シルト	B地点、断面で確認、堆積層は直方に似る	

第8表 桃生田前遺跡第3・4次調査検出遺構一覧

66号土坑

【位 置】B地点中央。

【検出面】地山面。

【規 模】長軸：0.50m以上、短軸：0.44m、深さ：0.31m。

【堆積層】1層は柱抜き取り痕跡、2層は柱穴掘り方埋土。2層上面で径0.13～0.15mの柱痕跡を確認。深さ約5cm 残存する。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔所 見〕 形態や堆積層から柱穴と考えることができ。しかし、下水管付設のため掘削幅が狭く、また、攪乱などの影響により他の柱穴を検出できなかったことから規模や方向などは不明である。なお、形態や規模、堆積層の状況から隣接する地点で検出した桃生田前遺跡25号建物跡の柱穴（瀬峰町教育委員会2000）と規模や堆積層が類似することから古代の建物跡を構成する柱穴と考えている。

68号土坑

〔位 置〕 B地点南側。

〔検出面〕 地面。

〔重 複〕 水道管により攪乱を受ける。

〔平面形〕 断面のみの確認のため不明。

〔規 模〕 長軸1.20m、短軸0.5m以上、深さ0.71m以上。

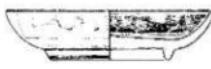
〔堆積層〕 暗褐色粘土質シルト。

〔出土遺物〕 水道管と重複する付近で近世磁器（肥前産）1点が出土した。土坑に伴うものか水道管埋設坑に含まれるものかは確認できなかった。

〔所 見〕 堆積層が基本層と類似することから近世以降の遺構である可能性が高い。



第35図 66号土坑



No.	遺物名	残存	底高	口径	底径	特 徴	參 考
1	近世磁器 高台付瓶	2/5	3.1	12.8	7.0	内面：ロクロナガ、合付：明暦灰（1657/1）、底部：ロクロナガ、蓋付、内面：ロクロナガ、蓋付、明暦灰（1657/1）。 肥前産	R001

第36図 出土遺物

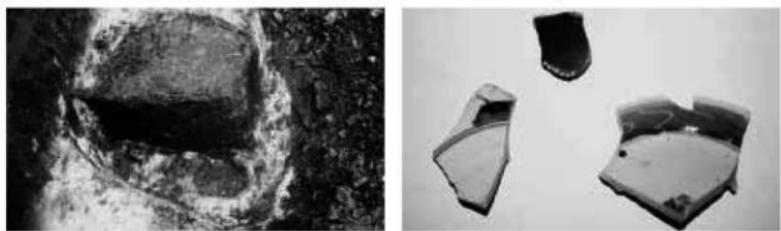
5. まとめ

水道管及び下水管付設に伴う工事立ち会いにより、次のことが判明した。

- (1) 古代の土坑、中世から近世以降のビット、溝跡、土坑を確認した。対象地西側で灰白色火山灰を含む沢か旧河川とこれより新しい近世以降の河川跡を確認した。このことから遺跡範囲の東西をほぼ確定できたと考えている。
- (2) 66号土坑は建物跡を構成する柱穴の1つで規模や形態から古代のものと考えている。約50m離れるほ場整備に伴う事前調査区では古代の遺構を確認しており、古代の遺構が西側に広がることが判明した。

引用文献

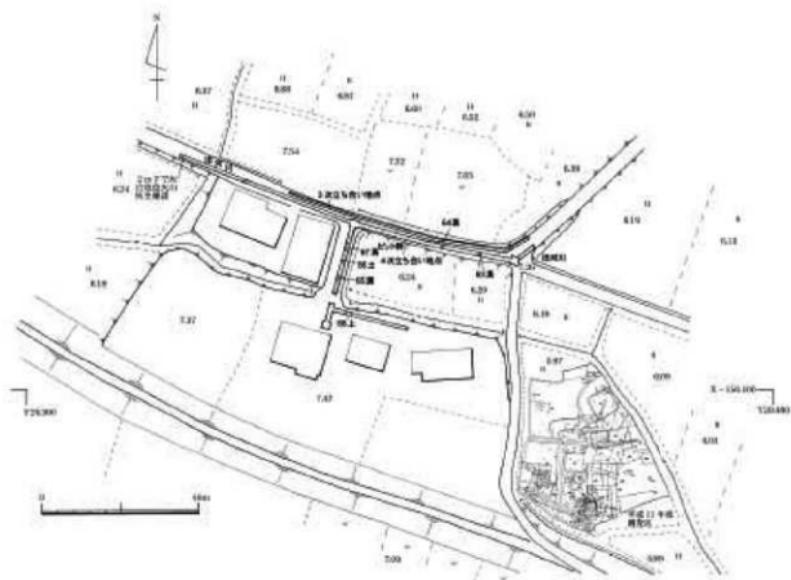
瀬峰町教育委員会 2000『桃生田前遺跡・下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第19集



66号土坑（南より）

出土遺物

図版11



第37図 第3・4次調査で確認した遺構の位置

X. 杉ノ壇遺跡

1. 調査要項

【遺跡名】	杉ノ壇遺跡（遺跡登載番号 46026）	【調査原因】	草地造成工事に伴う確認調査
【所在地】	宮城県栗原郡瀬峰町大里字富寺浦17-1	【調査期間】	平成11年11月26日
【調査面積】	約375m ²	【地権者】	佐藤二郎
【調査主体】	瀬峰町教育委員会教育長 及川秀美	【調査担当】	瀬峰町教育委員会社会教育課主事 安達訓仁
【調査協力】	阿部博志（宮城県教育庁文化財保護課）、宮城県農業公社、瀬峰町産業課		

2. 遺跡の位置

杉ノ壇遺跡は寺沢丘陵から東に派生する丘陵上、標高約30mに立地する。この丘陵は徐々に標高を減じながら低地部に至る。

遺跡は中・近世の塚、縄文時代、奈良・平安時代の散布地として登録されている。『栗原郡藤里村誌』によると維新前まで老杉があったため杉の壇と称し、開墾の際周囲を木炭で囲んだ素焼の甕、大小の刀などが出土したという（鈴木玄雄1922）。この壇や出土した遺物などは現在確認できないが、その位置は東に張り出した丘陵南側斜面であるという（註1）。これまでの踏査などでは主に南側平坦面の畑部分から縄文時代の石器類や奈良・平安時代の遺物を採集している。

3. 調査に至る経緯

平成11年7月瀬峰町産業課から宮城県農業公社の補助事業である草地造成計画があるという連絡があった。杉ノ壇遺跡の範囲内である。10月に農業公社より協議書の提出を受け、宮城県教育庁文化財保護課、農業公社、町教育委員会で協議を行い、遺構を検出した場合は事前調査を実施せず、盛土を行い現地形を利用した造成にすることとした。

確認調査は11月26日に行った。丘陵斜面及び南側平坦面に任意に5本のトレーニングを設定し、重機により掘り下げを行った。標高28m以上では粘土層は確認できず、礫層となることから粘土層は流出している可能性が高い。南側平坦面で溝1条を確認したが盛土される地点であったので、掘り下げは一部にとどめ、各種記録を作成し調査を終了した。

4. 基本層序

- I層 褐色粘土質シルトでしまり、粘性はない。丘陵頂上部から斜面にかけてみられる。層厚約20cm。
- II層 黒褐色粘土質シルトであり、しまりはふつうで粘性はややある。南側の牧草地として利用されていた部分のみに見られる。層厚は5～20cmである。



第38図 調査区の位置



第39図 調査区平面図

III層 黄褐色粘土である。本遺跡の地山であり、標高28m以下で確認される。

IV層 黄褐色粘土質シルトで礫を多く含む。丘陵頂部にみられる。

5. 検出した遺構と遺物

(1) 溝跡と出土遺物

丘陵平坦面に設定した2トレンチⅢ層上面で東西方向の溝1条を検出した。溝跡は幅約1m、深さ約0.25m、堆積土は黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

(2) 表土出土遺物

出土した遺物には土師器の細片4点、陶器皿底部1点、剥片（鉄石英製）2点がある。また、対象地中央で頁岩製の剥片を採集した。

6. まとめ

丘陵南側平坦部付近の調査区で溝跡1条を確認した。遺物が出土しないため、時期は不明である。丘陵南側平坦部で遺構や遺物を確認したことは踏査時の所見と同じであり、付近に遺構、遺物が存在する可能性が高いと考えている。杉ノ塙とよばれる「塙」については今後確認調査により位置を確認する必要がある。

註

註1 平成12年7月に元瀬峰町公民館長佐々木徳雄氏より現地で位置などをご教示いただいた。

引用文献

鈴木玄雄 1922『栗原郡藤里村誌』上巻 栗原郡藤里村誌編纂委員会



近景（北より）



2 T（北より）



溝跡（東より）



「大杉」「杉の壇」があったといわれる地点（東より）



「大杉」「杉の壇」があったといわれる地点（東より）

故佐々木徳雄さんが立っている付近に大杉、若干離れて壇があったという。

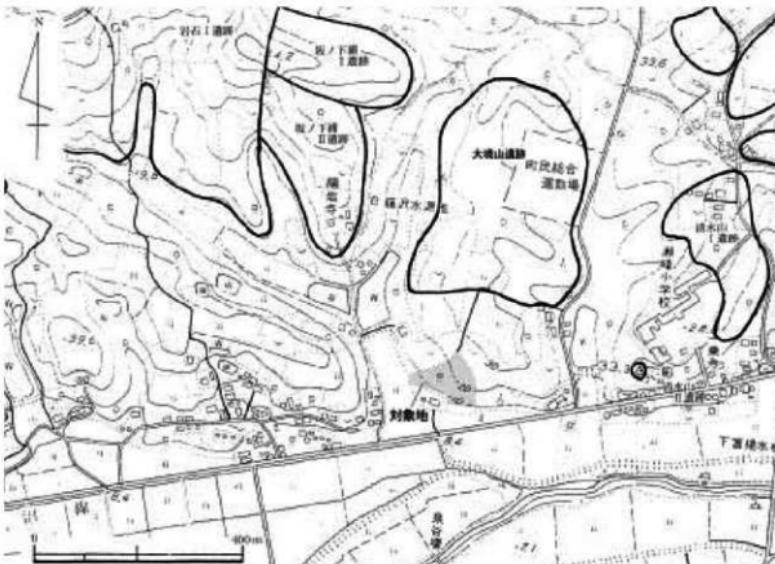
XI. 大境山遺跡隣接地の塚群

1. 要 項

【遺跡名】	大境山遺跡隣接地の塚群（遺跡登録番号：-）	【調査原因】	土取りに伴う事前調査
【所在地】	宮城県栗原郡瀬峰町大里字富大境山11-7	【調査面積】	約820m ²
【調査主体】	瀬峰町教育委員会教育長 手島正夫		
【調査担当者】	瀬峰町教育委員会教育課社会教育主事 阿部正光		
【地権者】	佐々木嘉一	【調査期間】	昭和60年8月7、12、13日
【調査協力】	宮城県教育庁文化財保護課、仰佐々貞土建		

2. 調査に至る経緯

瀬峰町大里字富大境山11-7で公共事業に伴う土取り工事があることが判明した。ここは寺沢丘陵から南側に延びる丘陵の西側斜面に位置する。大境山遺跡に近接し低平な塚が分布することから仰佐々貞土建と協議を行い事前調査を行うこととし、昭和60年8月に協議書と発掘の届出の提出をうけた。昭和60年8月7日から調査を開始し、地形図作成と表土除去、12~13日に塚の断ち割りなどを行い、各種記録類（1/40断面図、35mmモノクロによる写真撮影）を作成し調査を終了した。図面整理などは昭和60年度に行い、報告書作成は平成15年度に実施した（註1）。



第40図 遺跡の位置

II. 大塙山道跡隣接地の塚群



第41図 調査区の位置



第42図 1～4号塚平面図

3. 基本層序

基本層序は次のとおりである。

I層 褐色 (10YR4/4) 砂質シルトで草木根を多量に含む。表土である。

II層 褐色 (10YR4/6) 砂質シルト。旧表土である。

III層 明黄褐色 (10YR6/8) 砂質粘土。本遺跡での地山である。

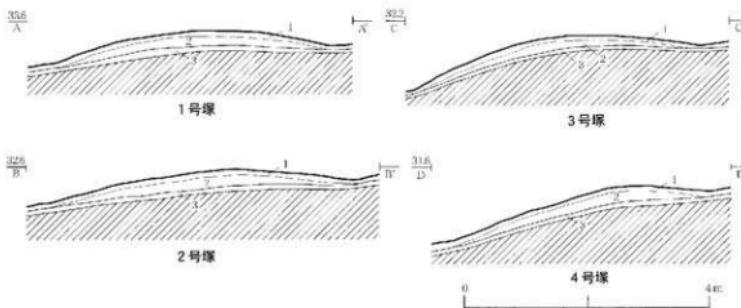
4. 検出した遺構と遺物

(1) 塚と出土遺物

現地には塚と考えられる高まりが4基あり、調査によりいずれも盛土を伴う塚である事を確認した。1号塚が若干離れて位置し、2～4号塚は丘陵尾根上、約17mの範囲内に丘陵尾根に沿いやや弓なりにほぼ一列に並ぶ。盛土はいずれも1層であり、黄褐色(10YR5/6)砂質シルトで草木根を少量含んでいる。埋葬などにかかわる主体部等や周溝などの施設及び遺物は一切確認できなかった。詳細は第9表に示す。なお、遺構外から遺物は出土していない。

塚	位 置	平面形	標 高	(単位: m)			盛土厚	盛土層
				南	北	東		
1号塚	東側、2～4号塚より4m離れる	楕円形	32.84	4.50	4.25	0.08～0.50	0.16	1層
2号塚	3基並び東側、	楕円形	32.54	5.00	4.83	0.11～0.32	0.18	1層
3号塚	3基並び中央、2号塚より2.8m離れる。	楕円形	31.95	5.25	4.83	0.01～0.71	0.12	1層
4号塚	3基並び西側、3号塚より0.8m離れる。	楕円形	31.29	5.08	4.25	0.08～0.82	0.16	1層

第9表 塚属性表



No.	土 色	土 性	層 种	地盤範囲
1	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	草木根を多量に含む、表土。	I 層
2	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	草木根を少量含む、盛土。	盛土
3	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	旧表土。	II 層
4	明黄褐色 (10YR6/8)	砂質粘土	地 山	III 層

第43図 1～4号塚断面図

5. まとめ

調査の結果、4基の低平な塚を確認した。いずれも径4～5m前後の隅丸方形である。主体部や周溝などの施設は確認できず、遺物も出土しない。このことから塚が構築された年代や性格は不明である。塚下部及び周辺に旧表土が残存することから、盛土は他の場所より土取りを行い用いたと考えている。

塚はいずれも丘陵尾根に沿うようにやや弓なりで1列に位置していることが判る。高さ1m前後の盛土をもう群集する瀬峰町下藤沢Ⅱ遺跡（瀬峰町教育委員会1988、註2）の塚群は、発掘調査により17世紀前半の近世墓であることが判明しているが、分布のあり方は異なっている。瀬峰町内で大境山遺跡隣接地の塚群と同様の立地のあり方をもつものは四ツ塚（佐藤・阿部・赤沢・佐藤1987）、四ツ塚（瀬峰町史編纂委員会1966）があるが、塚の規模は異なる（註3）。

県内で例となった塚で発掘調査が行われたものとして金成町小迫字高見山七ツ森（金成町史編纂委員会1973）、白石市権現山遺跡（宮城県教育委員会1980）、松島町山下遺跡（宮城県教育委員会1982）がある。高見山七ツ森は13基の塚から構成され十三塚と考えられている。形態は方形ないし円形で、径5～10m、高さは1.3～1.8mである。このうち4、7、8号塚について発掘調査が実施され、盛土層内からは炭化物が確認された。特に8号塚では黄色みを帯びた盛土下部、黒色土層上面で藁か萱と思われる植物が結束され立てられた状態で確認され、その下部は赤色になっていた。このことから火を用いた儀式が行われた可能性も考えられている。また、塚が立地する丘陵が村境にあたると指摘されている。権現山遺跡は丘陵尾根上に立地し、径約2.0～4.1m、高さ約0.46～0.70mを計る円形の塚が5基確認されている。調査の結果、内部主体や遺物は確認されず、性格は十三塚に類似した何らかの造構であろうとしている。山下遺跡は3基の塚からなり、丘陵尾根上に位置する。各塚の間隔は30～45mと広い。1号塚は円形で径9mであり、発掘調査では主体部や周溝は確認されていない。2・3号塚は現況で梢円形や長方形で4～6mを計り、規模や形態は異なる。性格は字境にあたることから境塚と推定している。塚の数は異なるが、大境山遺跡隣接地の塚は規模、高さなどの点で権現山遺跡第1～5号塚に類似点が多く認められる。

ところで十三塚については、神奈川大学日本常民文化研究所による集成、分析（神奈川大学日本常民文化研究所1984、1985）があり、測量図や地籍図の検討により尾根や道路沿いに分布することから地境いであるという指摘もある（村田文夫1985）。県内の類例やこの見解を参考にすると大境山遺跡隣接地の塚群が丘陵尾根に位置することは地境いを示す塚の可能性が考えられる。しかし、瀬峰町税務課所蔵の明治19年作成地籍図や現在の地籍図の字境とはうまく対応せず、江戸時代の村絵図なども存在しないことから、この見解を積極的に裏付けることはできていない。なお、中世城館の縄張り図調査で防御の必要のないと思われる地点で低い土手が長く続くことが観察できることがあることを村田修三氏は指摘しており、このような防御性の伴わない盛土は地境いを示すとしている（村田修三1987）。瀬峰町内で地境いと考えられる低い土手は瀬峰町藤沢字下藤沢地内（藤沢館跡の北側で下藤沢Ⅰ、下藤沢Ⅲ遺跡の範囲内）にある。丘陵尾根付近に幅1m前後、高さ50cmほどの盛り土を確認しており、現在の地籍

図ともほぼ対応する。このことから地境いの遺構には塚を築くものと土手を築くものがあると考えている。形態や規模の違いについては、村境などの場合（公的に近いもの）は十三塚など規模の大きいもの（註4）、私的な場合は十三塚より規模の小さい低い土手や塚を築いた可能性があると考えているが、規模の違いや形態が社会的な関係を反映しているかどうかや構築された年代などは調査事例の増加や地籍図との比較、文献などでの検討が必要であると考えている。また、十三塚の性格は地境いを示すものだけではなく、武士や僧侶を埋葬したという伝承を持つものも多い（註5）。発掘調査では金成町小迫字高見山七ッ森で炭化物が検出されていることや神奈川県横浜市鶴見区北寺尾町の十三塚では土師質土器が出土していること（村田夫1985）から、構築にあたっての儀礼や性格、その背景はさらに検討することが必要である。

註

- 1 写真台帳がないため写真がどの塚を撮影したものか不明である。明らかに分かるもののみ掲載した。
- 2 下藤沢Ⅱ遺跡の南側に隣接する下藤沢Ⅲ遺跡でも平成5年に発掘調査を実施し古代の住居跡、盛土を持つ近世墓を検出している。
- 3 四ツ塚は平成5年に県道田尻瀬峰線改良工事に伴い、残存していた2基について発掘調査を実施している。報告書は近刊予定である。このほか、瀬峰町藤沢字荒神堂に所在する十三塚とされるもの（瀬嶺・新田沢部落史編纂委員会1980）があるが、現地踏査を実施していない。
- 4 十三塚ではないが代表的なものに岩手県北上市に所在する南部・伊達両藩塚（岩手県教育委員会1967ほか）がある。
- 5 柳田・堀1948、神奈川大学日本常民文化研究所1984、1985による。なお、栗原郡内では序文に享保4年（1719）の記載を持つ佐久間洞巖が記した『奥羽觀聞志』巻之八「十三塚」、「大原木十三塚」の項に「戦死者の塗」、「戦死の古墳」とある（仙台叢書刊行会1936、343～345頁）。

参考引用文献

- 岩手県教育委員会 1967『南部・伊達両藩塚一北上川以西部』岩手県文化財調査報告書第17集
 神奈川大学日本常民文化研究所 1984『十三塚－現況調査編－』平凡社
 神奈川大学日本常民文化研究所 1985『十三塚－実測調査・論考編－』平凡社
 唐沢至朗 2003『民衆宗教遺跡の研究』高志書房
 金成町史編纂委員会 1973『第八章 小迫字高見山七ッ森（十三塚）発掘調査報告』『金成町史』488～498頁 金成町
 瀬峰町史編纂委員会 1966『瀬峰町史（全）』瀬峰町
 瀬嶺・新田沢部落史編纂委員会 1980『東北では六十番目の発見か 十三塚と見られる土まんじゅうの列』『早稲八幡の里』瀬嶺・新田沢部落史』120～121頁
 仙台叢書刊行会 1936『仙台叢書』第15巻（1972年宝文堂刊行の復刻版を参照）
 宮城県教育委員会 1980『権現山遺跡』『東北自動車道調査報告書』宮城県文化財調査報告書第69集
 宮城県教育委員会 1982『山下遺跡』『松島有料道路関連調査報告書』『館山館跡 山下遺跡』宮城県文化財調査報告書第87集
 村田修三 1987『中世の山城』『図説中世城郭事典』第一巻 新人物往来社 8～20頁
 柳田国男・堀一夫 1948『十三塚考』三昭堂



遠景（西より）



1号塚（南より）



2～4号塚（北より）



XII. 寺山遺跡採集の弥生土器について

1. はじめに

ここで紹介する土器は、昭和49年3月に青沼弘氏が寺山遺跡（遺跡登録番号460015）内で採集した（註1）ものであり、詳細な出土状況、共伴遺物などは不明である。現在は瀬峰町教育委員会で保管している。

瀬峰町内では大塚山遺跡（註2）で中期後半の円田式、後期の踏瀬大山式、岩石I遺跡（註3）で後期の天王山式の破片が出土しているが、遺構は確認できず町内における弥生時代の様相は不明といわざるを得ない。寺山遺跡採集の弥生土器は瀬峰町内で出土した遺物の中でも最も残存状況が良好であることから資料紹介を行い参考に供したい。なお、本稿は故阿部正光が作成した実測図をもとに佐藤信行と安達訓仁で検討し作成した。

2. 採集遺物について

はじめに採集した土器の特徴をまとめ、次に類例から編年上の位置づけについて検討を行なう。

（1）特 徴

【器形】全体の約3/5が残存するが、底部は欠損している。器高18.3cm以上、口径16.6cmである。器形の特徴は体下部から体上部にかけて緩やかに外傾し、体部中央付近のやや上部よりわずかに内傾して頸部に至る。体部最大径は体部中央付近よりやや上有る。頸部から口縁部に向かいやすく外傾する。頸部と口縁部の境はケズリ調整により軽い段を持つ。狭い口縁部はわずかに肥厚する。口縁部は不規則で僅かに波打つ。口唇部は断面四角形である。特徴から器形は甕である。

【調整・文様】外面では口縁部がナデ調整であり、口唇部平坦面にはL R 繩文が横位施文される。頸部から体下部にかけて横方向に幅1.5~1.8cmの幅広なケズリ調整される。ケズリ調整に顕著な砂粒の移動痕跡がほとんどなく、器面は滑らかである。これは器面が生乾きの時点での調整を示唆する。下部にL R 繩文が縦位か斜位回転で横位施文されたのちにナデ調整される。このため、繩文原体はつぶれ気味となる。また、上部のケズリ調整された部分にも部分的にL R 繩文の痕跡を観察することができる。調整の新旧関係から外面の調整・施文の順序はナデ調整→繩文施文（→ナデ調整）→ケズリ調整である。

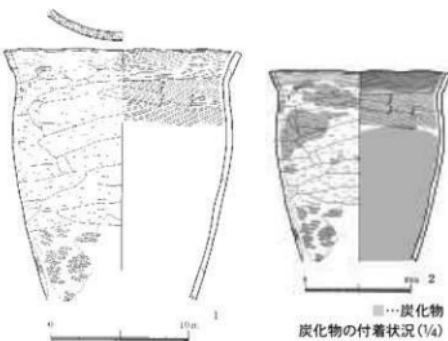
内面では口縁部は横ナデ調整である。体部は横方向のナデ調整で、下部は炭化物付着のため確認できない。

【色調】外面は褐灰色（10YR5/1）～にぶい橙色（7.5YR7/4）、内面はにぶい橙色（7.5YR7/4）である。

断面でみると上部ではにぶい黄橙色(10YR7/3)で下部では黒褐色(10YR3/1)である。胎土には石英を若干含んでいる。

【そのほかの特徴】頭部よりややさがつた位置に径0.4cmの穿孔が2個ある。孔の間隔は2.8cmである。孔の周辺を観察すると断面形は鼓形ではないため1方向から開けられたものである。孔はこの2個のみであり、その中間に口縁部から体部にかけての割れ目があることから補修のための孔と考えている。

また、外面と内面のほぼ全面に煤状の炭化物が付着する。口縁部の外面や体部の内面の一部など部分的には厚く付着する(第45図2)。



第45図 採集遺物



寺山遺跡採集の弥生土器



口唇部の縄文



補修のための孔



体部の調整痕跡

図版15 採集遺物

(2) 編年上の位置づけ

本資料には沈線文や刺突文といった狭義の編年上の位置を推定する明確な特徴に乏しい。また、全体的に特徴が類似する資料も極めて少ない。そこで、本資料の特徴をまとめ、宮城県と隣県の類例と比較する。

本資料の特徴は次の4点にまとめることができる。

- ①体下部からゆるやかに外形して立ち上がり頸部から口縁部にかけてくの字状に外反する甕。
- ②無文の口縁部は幅が狭く口唇部には繩文をもつ。
- ③横位の幅広いケズリ痕が頸部から体部下半にかけてある。
- ④体下半のケズリ痕の下方にL R 繩文が↖、↗、↓回転の横走繩文が施される。

口唇部に繩文を施すのは東北地方の弥生前期から終末までの土器に確認できるが、口縁部に繩文を施す肥厚口縁という特徴は後期の天王山式（註4）を中心に前後する時期に多くみられる。天王山式期の複合・肥厚口縁には沈線文、刺突文をもつものと繩文・撲糸文のみのものがあり、無文のものは少ない。口縁部の幅が狭く無文のものは天王山式のうちでは古い段階、またはその前段階に類例がある。天王山式の後半ではむしろ口縁部が広くなる傾向がある。類例は後期では名取市清水遺跡明神岡地区焼土状遺構下層出土土器（第46図4）（註5）、仙台市下ノ内浦遺跡7層出土土器（第46図5）（註6）のほか、中期中葉では岩手県水沢市橋本遺跡出土土器（註7）などにわずかにみることができる。天王山式では体部の最大径が体部下半にあるものが多く、本資料では体部上半にある点で異なる。橋本遺跡では前述の特徴に加え、頸部から口縁部にかけての器形が類似するものがある（第46図1）。

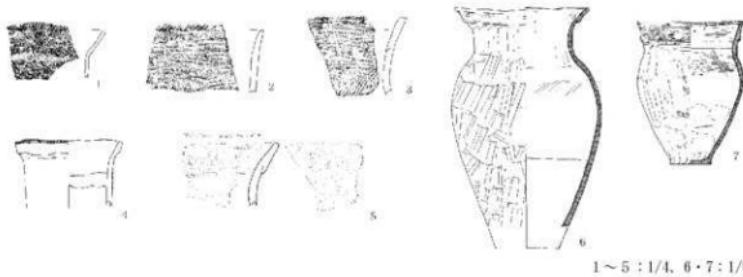
本資料の最大の特徴は体部上半にケズリ調整を残すことであるが、宮城県内の天王山式期では顕著にみられるものではない。ケズリ調整は初期段階の器面調整技法のひとつとして一般的なものであり、表面の場合その後に行なわれるミガキ、ナデ等の最終調整によって、通常ではあまりその痕跡をとどめないと考えられている。古墳時代以降の土師器では多くの器種で観察できるが、弥生土器でも確認できる例があり、中期前葉では仙台市中在家南遺跡出土土器（註8）、中期中葉では橋本遺跡出土土器、後期では岩手県江刺市兎II遺跡出土土器（註9）、仙台市富沢遺跡第24次調査VIIc層出土土器（註10）、富沢遺跡第104次調査6層出土土器（註11）、福島県いわき市八幡台遺跡1号住居、2号住居出土土器（註12）などがある。

ケズリ調整が施される器種は、橋本遺跡で甕、壺、高杯、蓋とほぼ全器種に及ぶが他の遺跡ではほとんどが甕のみである。施文調整部位は兎II遺跡で体中部、橋本遺跡、八幡台遺跡では全面に及ぶほかは底部付近にわずかに残存する場合が多い。方向は兎II遺跡では横位であり、そのほかの遺跡ではいずれも縦位である。また、八幡台遺跡で確認できる全面にケズリの痕跡のみを残す無文の甕の一群（第46図6、7）は特徴的であり、ケズリ調整以外に装飾やほかの調整を残さないことは成形のちケズリ調整だけを行なうという土器作りの省力化を示すものと思われる。橋本遺跡では口縁部から体部上半にかけて条痕状の荒々しい横位のヘラナデ痕を残す例がある。さらに口唇部と体部下半に繩文を残すなど本資料に通じるものがある（第46図2、3）。

ケズリ調整が施される例をみてきたが天王山式前後の時期にケズリ調整は多くはないが一定量存在している。しかし、それらは体部上半よりも下半または底部付近に多く、施文方向も縦方向が一般的である。本資料は最終調整に近い段階でケズリ調整されることは調整技法の手段としてではなく装飾的な効果をねらったものと考えている。

3.まとめ

年代がわかる明確な特徴がなく、類例が少ないと編年的な位置づけに苦慮するが、総合的に判断すると寺山遺跡採集の弥生土器は天王山式系のうちでは後半よりもその前段階または初期段階に位置づけられる可能性がある。また、本資料を特徴づけるケズリ調整は装飾的な効果を意図したとみられ、極めて特異な例である。今後、類例の増加を待って検討を加える必要がある。



第46図 宮城県内と隣県の類似する弥生土器

註

- 註1 漢峰町教育委員会1985『がんげつⅠ遺跡第3次調査』瀬峰町文化財調査報告書第5集、6頁の註3に記載がある。宮城県教育委員会1972『東北自動車道関係遺跡分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書第27集、22-23頁では大鶴谷南向遺跡としてアメリカ式石塚の採集を記載している。また、瀬峰町教育委員会1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第1集、6頁の註5では古館遺跡とする。これらは同一の場所で現在の寺山遺跡と考えている。なお、現在アメリカ式石塚は所在不明である。
- 註2 瀬峰町教育委員会1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集、228-232頁。
- 註3 瀬峰町教育委員会1985『がんげつⅠ遺跡第3次調査』瀬峰町文化財調査報告書第5集、19-20頁。
- 註4 坪井清足1953『福島県天王山遺跡の弥生式土器一東日本弥生式文化の性格ー』『史林』第36巻第1号、50-63頁、史学研究会
- 註5 名取市教育委員会1982『清水遺跡神明圓地区』名取市文化財調査報告書第II集
- 註6 仙台市教育委員会1996『下ノ内浦・山口遺跡-仙台市高速鉄道関連遺跡調査報告書V-』仙台市文化財調査報告書第207集、80-125、416-420頁。
- 註7 佐藤嘉広・伊藤博幸・池田明朗・佐々木千鶴子 1995『岩手県水沢市橋本遺跡出土資料について(補遺)』『岩手県立博物館研究報告』第13号、27~48頁、岩手県立博物館
- 註8 赤沢清章1996『中在家南遺跡出土の弥生土器について』『中在家南遺跡他』仙台市荒井土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書 第2分冊 分析・考察編』仙台市文化財調査報告書第213集、105頁、仙台市教育委員会
- 註9 仙台市教育委員会1988『富沢遺跡第一-24次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第113集
- 註10 仙台市教育委員会1999『富沢遺跡第104次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第235集、35-36、125頁。
- 註11 岩手県埋蔵文化財センター 1979『鬼丘遺跡 主要地方道一闇・北上線関連遺跡調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第8集
- 註12 いわき市教育委員会1980『八幡台遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書第5冊

報告書抄録

ふりがな	しみずやまいまいちいせきほか							
書名	清水山I遺跡ほか							
副書名								
卷次								
シリーズ名	瀬峰町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	安達訓仁							
編集機関	瀬峰町教育委員会							
所在地	〒989-4502 宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字下田32-1 TEL 0228(38)2171 FAX 0228(38) 3280							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
清水山I遺跡 (第1次)	宮城県栗原郡瀬峰町 大里字富清水山26-1	045268	46032	38° 39° 7"	41° 3° 52"	1986.07.01 ~07.03	1,750	幼稚園建設造成
清水山I遺跡 (第3次)	宮城県栗原郡瀬峰町 大里字富清水山33-1	045268	46032	38° 39° 20"	41° 3° 44"	2004.01.26	50	個人住宅
長者原II遺跡 (第3次)	宮城県栗原郡瀬峰町 藤沢字長者原32-5.35-4	045268	46038	38° 39° 10"	141° 4° 3"	1994.11.15 ~12.02	1,470	町道改良工事
民生病院裏遺跡 (第3次)	宮城県栗原郡瀬峰町 大里字富桃生田	045268	46036	38° 39° 1"	41° 4° 8"	1999.01.12 ~01.21	1,500	中学校体育館建設
民生病院裏遺跡 (第4次)	宮城県栗原郡瀬峰町 藤沢字下田	045268	46036	38° 39° 13"	141° 4° 8"	2000.03.10	94.4	下水道埋設
岩石I遺跡 (第4次)	宮城県栗原郡瀬峰町 大里字富寺浦157-7	045268	46017	38° 39° 47"	41° 4° 8"	2003.04.30	700	農業用施設建築造成
長者原I遺跡 (第3次)	宮城県栗原郡瀬峰町 藤沢字長者原、大里字富清水山	045268	46024	38° 39° 16"	41° 3° 58"	2003.07.05. 06	210	個人住宅
桃生田前遺跡 (第3・4次)	宮城県栗原郡瀬峰町 大里字富桃生田	045268	46047	38° 39° 2"	41° 3° 50"	2002.05.01~06.05 2003.05.27~09.26	226	水管管、下水管埋設
杉ノ塙遺跡	宮城県栗原郡瀬峰町 大里字富寺浦17-1	045268	46026	38° 39° 10"	41° 2° 51"	1999.11.26	375	草地造成
大境山遺跡 隣接地の塚群	宮城県栗原郡瀬峰町 大里字富大境山11-7	045268	—	38° 39° 5"	41° 3° 29"	1985.08.07. 12.13	820	土取り工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
清水山I遺跡(第1次)	集落跡	奈良	竪穴住居跡1棟		土師器・須恵器			
清水山I遺跡(第3次)	集落跡	奈良	土坑2基、ピット1		なし			
長者原II遺跡(第3次)	集落跡	奈良・平安	竪穴造構1基		なし			
民生病院裏遺跡(第3次)	集落跡	奈良・平安・江戸	遺物堆積層、近世墓		須恵器・土師器、磁器、古銭、和鏡			
民生病院裏遺跡(第4次)	集落跡	奈良・平安	土坑1基		なし			
岩石I遺跡(第4次)	集落跡	奈良・平安	土坑1基		なし			
長者原I遺跡(第3次)	包蔵地	奈良・平安・中世	土坑1基		なし			
桃生田前遺跡(第3・4次)	集落跡	奈良・平安・中世	土坑2基、溝4条、ピット		土師器・近世磁器			
杉の塙遺跡	包蔵地	奈良・平安・中世	溝1条		土師器・陶器・石器			
大境山遺跡隣接地の塚群	塚	不明	塚4基		なし			

瀬峰町文化財調査報告書第22集
清水山 I 遺跡ほか

平成16年3月24日 印刷
平成16年3月31日 発行

発行 瀬峰町教育委員会
〒889-1502 宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字下田32-1
TEL 0228-38-2111・2172

印刷 南部屋印刷株式会社
〒989-2215 宮城県栗原郡柴田町高田一丁目7-36
TEL 0228-22-2131
